

60400

教科書文庫

6
810
45-1949
D1304
49657

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

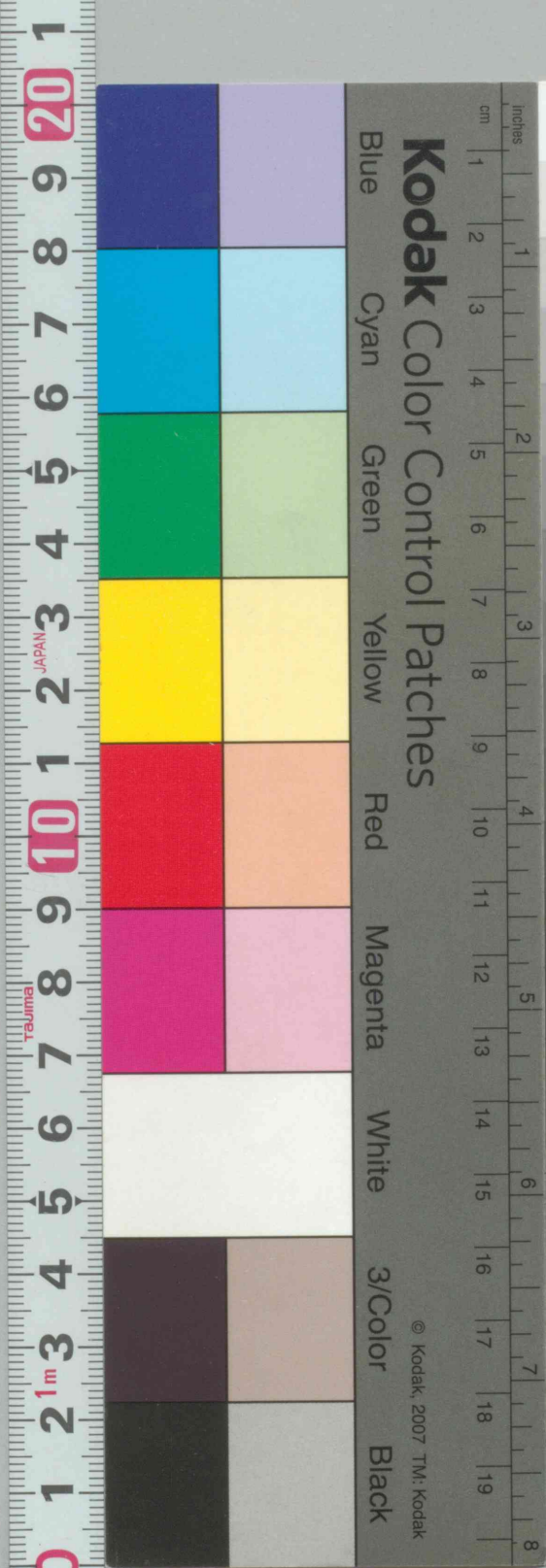


© Kodak 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

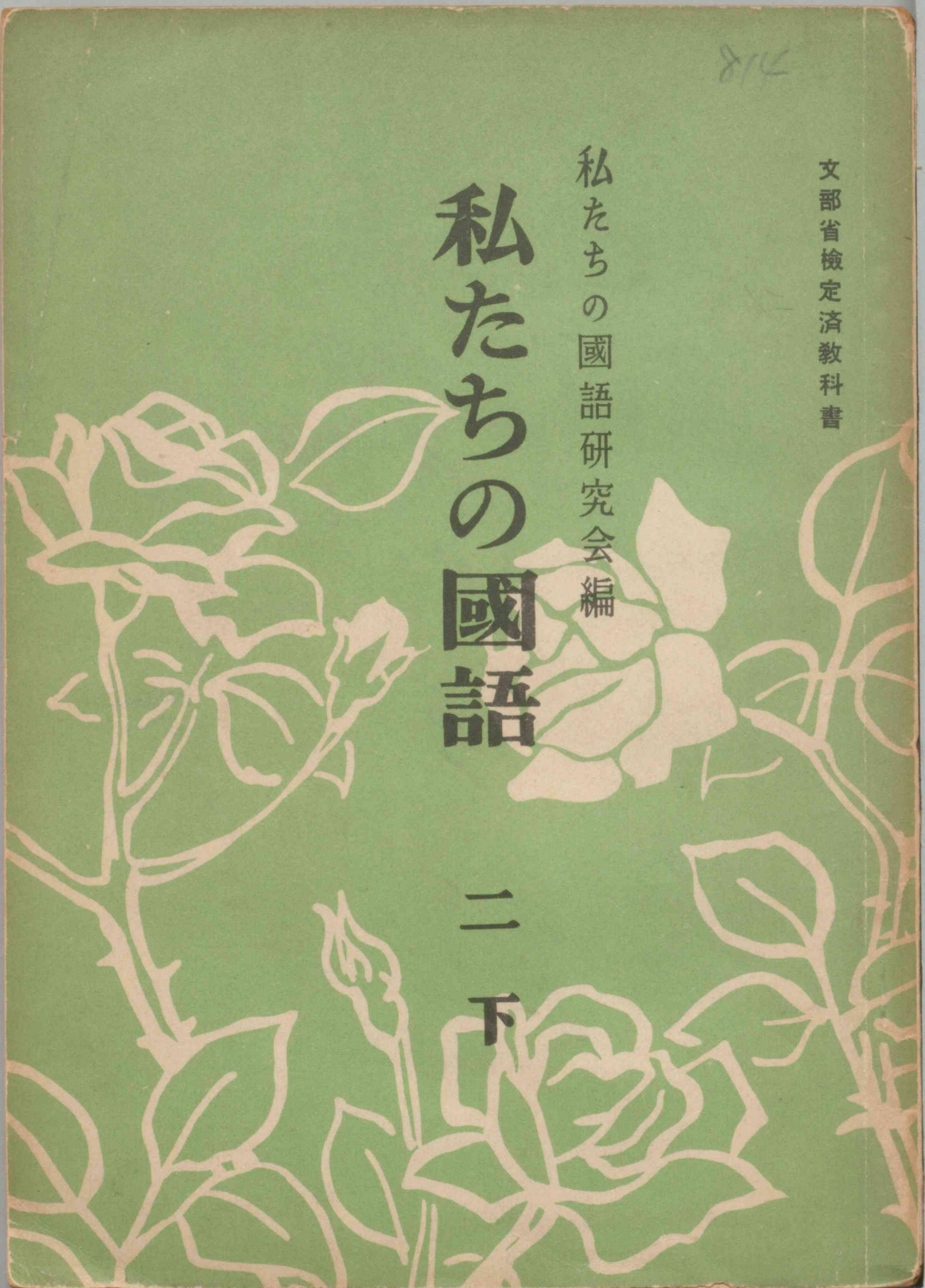


文部省検定済教科書

私たちの國語研究会編

# 私たちの國語

二下





私たちの國語

二下



昭和二十四年十月十日  
文部省検定済  
中学校國語科用

中央図書館

広島大学図書

0130449657





# 花雨集

## 目次

一 生活の向上をめざして……………	一
ラジオのつどい……………	三
二 随筆……………	十四
〔一〕 すゝめの話……………	十六
〔二〕 引越し……………	二十二
〔三〕 おいたちの記……………	二十八
三 眞実の表現……………	三十六
〔一〕 短歌の作り方……………	三十八
〔二〕 雨にもまけず……………	四十五
四 お話……………	五十二
〔一〕 クレヴァアハンスのまちがい……………	五十四



# 生活研究

〔一〕 一に十二をかけるのと 十二に一をかけるのと	六十二
五 研 究	九十
〔二〕 な ぞ	九十一
〔三〕 擬声語の収集	百六

## 一 生活の向上をめざして

人が常にもっと楽しい生活がしたい、よりよい生活がしたいと希望することは、人間の最も自然な最も正しい欲望である。この欲望があるからこそ、人はその現在の状態を少しでも改善し、いっそう進歩したものにするための努力を惜しまない。ひとりひとりの努力が、その人々の生活を、少しずつ、その人々の理想に近いものに、引きあげてゆくと同時に、その人々の構成している社会の進歩を促し、社会の進歩は、また、その社会に包含されている人々の生活を、より幸福なものにしてゆく。私たちのひとりひとりの、孤立した生活などというものの考えられない今日の社会において、自分と関係を持つ人々のことを、まるっきり考えないで、たゞ自分のことばかり考えるということは、およそ、愚かなことであって、かえってそれは、自分の生活をすっかりためにしてしまふような結果を招くことになる。私たちは、どこまでも、自分とともに生活する人のことを考え、その人たちとともに力を合わせて、おの／＼の希望を実現してゆくようにしたい。

ところで、私たちの生活を改善してゆくには、いろ／＼の方法がある。しかし、どんな問題を解決するにも、その根本は、自分でよくその問題の、よってきたるところを窮め、それに対する解決の方法を合理的に求めてゆくことにあるが、やはり、その道の専門家や、進んだ考えを持った人々の意見を聞いてみるのがたいせつである。だが、この場合にも、



たとい、どんなに名声を博している、その道の専門家の言うところでも、必ずそれを自分の実際の経験にあてはめてみて、その是非を考えてみる必要がある。その言うところを、他の人々とともに研究し、話しあつた上で、自分の生活に採り入れてゆくというところが、望ましい。いろ／＼の人と、一つの問題について話しあうことによつて、自分の考えも発展し、はっきりしなかつたところもめいりようになつてゆくのである。

専門家や先輩の考えを参考にするためには、読書をしたり、名士の講演を聞いたりする。その読書や講演を、ほんとうに自分たちの生活に採り入れるためには、読書を基にして読書会を、講演を中心にして討論会を開くのがよいと思う。読書のことは、しばらくおいて、次に討論について少しく述べておこう。

民主主義とは討論することであると言つていくらい、民主主義の社会では討論が重んぜられる。討論は、すべての人が平等の立場に立つて、めい／＼自説を述べあい、他人の意見を聞きあつて、正しい考え方を発見してゆくことを目的にしているのであつて、問題を解決するための、最も民主的な手続きだからである。われ／＼はどうしても、討論の技術を身につけなければならぬ。

討論をうまくやるためには、(1)できるだけその問題に関する廣い知識を持ち、(2)いろいろの方面から、その問題を考察して、その問題に対する自分の考えをはっきりさせ、(3)それを発表する順序なども、あらかじめ、準備しておくことが必要である。しかし、それが役立つためには、討論のいろ／＼のやり方、たとえばその作法に習熟し、その場に應じて、

自由な氣持で自説を主張し、寛容な態度で、反対の意見を聞くことができることがたいせつである。討論の経験を積み、練習を重ねていないと、前に述べたようないろ／＼の準備が、たとい完全になされていても、その力を發揮することができない。この意味からいって、われ／＼は、討論によつて自他の啓発に努めるとともに、討論そのものに慣れるために、できうるだけ多くの機会を利用するようにしなければならない。

### ラジオのつどい

日本放送協会

一つのスピーカーの前に、多くの人が集まつて、同じ放送に耳を傾けるということは、きわめて普通のことであり、そのような場合、その放送に關して、放送終了後、そこに集まつた人たちが互に話しあうということは、きわめて自然に行われることであろう。何かの放送を中心にして、人が集まつて、一時を過ごすのであるから、当然これを「ラジオのつどい」と言つて、さしつかえはないはずであるが、こゝに言うのは、それとは意味を異にし、そのグループが組織化され、放送当業者との間に連絡がとられている、すなわち、偶然に集まつたグループではなくて、グループとして持続性を持ち、はっきりした目的や計画を持ったものをさしていることに注意してほしい。このような「ラジオのつどい」は、一九二九年BBC(英國放送協会)が討論團體の結成希望者に援助を與える方針を採るようになったのがはじめてである。「ラジオのつどい」は今日、米英兩國において盛んに行われており、社会教育の方面で大きな役割を演じている。近ごろ、わが國においても、その意義が高く評價されるようになり、NHK(日本放送協会)でも、「ラジオのつどい」の発展に努めている。

次に「ラジオのつどい」によつて期待される、國語學習上の効果について述べてみよう。ラジオの放送か



いろいろの問題をとりあげて、互に意見を交換し、自分たちの生活を向上させてゆくためばかりでなく、実際に討論の経験を重ねることによって、「ラジオのつどい」は、討論の技術を身につけてゆくのによい機会である。

「ラジオのつどい」は、一例を講演の場合にとれば、放送者の一つの講演を、めい／＼がどの程度に正しく聞きとつたかを、討論を通してはっきりさせる。これは國語を正しく、よく聞くことができるようになるという、われ／＼の大きな目標の達成に、期せずして努力が傾けられるようになる。また、聞いた講演の内容に対する自分の考えを明らかにし、それを、「つどい」に参加した人に、誤解なく理解されるために発表しようとするようになるから、これまた自分の思うことを、正しくよく話すという國語学習の大きな目標の達成に役立つのである。

更に「つどい」を組織的、能率的に推進するためには、人々がかわるがわる仕事を分担することになる。たとえば「つどい」に関する通知を出したり、「つどい」の記録を取ったり、その記録をまとめて、放送局に連絡するための報告書を作製したりする。どうしたい／＼の仕事を通じて実際生活上に必要な言語の諸能力を、おのずから培養してゆくことができるであらう。

また、次のような学習をすることもできる。すなわち、ラジオを聞くことによって文字を離れた國語の姿を、はっきりさせることができるから、放送者のことばづかひや、声の出し方などを参考にして、自分たちの言語生活の向上に役立てることができる。

われ／＼もこゝに載せられた「ラジオのつどい」の進め方についての概要を参考にして、「ラジオのつどい」を作ろうではないか。

#### ラジオの聞き方と「ラジオのつどい」

ラジオは聞くものであり、聞かされるものであると考えること、すなわち、どこまでも、ラジオを利用する主体が、放送者の側にあり、聴取者は常に受身の立場にあるように考えることは、正しくラジオを利用してゐるとはいえないと思います。なるほど、社会が封建的であればラジオを利用するのは、支配階級の人々であつて、一般民衆は、たゞ、ラジオによってその意図のまゝに動かされるといふことになりがちです。こんなふうですと、ラジオが、世の中のほんとうの進歩に貢献することは、案外少ないのではないのでしょうか。民主的な世の中になると、ラジオの利用も、廣くすべての人々に解放されてきます。むしろ聴取者の希望や要求によって、放送者が選ばれるようになります。かつては、言論を統一するために用いられることさえあつたラジオが、種々の異なつた意見を、互に発表しあい、すべての人の意見を、すべての人が知りあふ必要に答えるものとなってきます。

私たちは、私たち自身の生活をよりよくするための方法として、ラジオを使わなければならなくなりました。そのためには、聞えて来る放送を、たゞ耳の中におさめるだけではすまされません。もっと積極的に進んでラジオを使用するという立場に立たなければなりません。昔のようにレシーバーを耳に当てて、たったひとりで聞くものではなくて、スピーカーによってたくさんの人といっしょに聞くことができるようになったラジオは、更に、多くの人が集まつて、よりよい生活を、そして、よりよい社会を作りあげるための道具にならなければならないと思うのです。こゝに私たちのラジオの聞き方、ラジオの正しい利用法があるのです。

ラジオは聞くものであるというこれまでの考えは、今日では、考えなおされなければなりません。聞くということは、それだけでは、たいへんに注意が散漫になりやすいものです。たとい、いっしょ



うけんめいになって聞いていても、何かほかに注意が向けられると、たちまち耳の方はおるすになつてしまいます。そこで、私たちに、常に放送に対して、注意力が集中できるようになふんいきが必要になってきます。そして、その放送に対して、積極的な批判を持たなければならぬ立場にあって、はじめて、たゞ聞くだけではとらえることのできない、深い意味を自分のものにする事ができるのです。またそれがお、ぜいで聞くということになると、おのずと笑いに誘われ、涙を求められ、放送者と聴取者というものが、氣分的にもびったりしてくるわけです。こゝに私たちのラジオが、たゞ聞くだけということから進んで、私たちの心にびたりとくいとくいとこんでくるものになるのです。

受信機から出て来る放送をだまって聞くということだけで満足していた時代は、もはや過去のものになりつゝあります。

今日、放送局では、よりよい社会を築きあげるために、すぐれた専門家の意見や、そのほか、その目的にかなつた種々の放送をするために、あらゆる努力を盡くしてあります。これらの放送を注意深く聞き、それを、私たち自身の生活の実際に照らしてみても、その可否を批判し、その上に、私たちに正しく適するものを、みんなで考え出し、実行してゆかなければならないと思ひます。こうすることによって、ラジオは、たゞ聞くだけのものではなくなり、直接、私たちがよりよい生活を作り出すためのものとなるのです。

こゝに、新しいラジオの聞き方ができてまいります。そして、それに伴ない、このようなラジオの聞き方をするためのグループができてきます。これを名づけて、「ラジオのつどい」といっています。

#### 「ラジオのつどい」の種類

ラジオを正しく利用し、私たちの生活をよりよくするための、新しい試みである「ラジオのつどい」——これは、一体どのような行つていったらよいでしょうか。多くの方が、いっしょに同じ放送を聞き、放送を聞いたあとで、その放送に関して互に意見を交換する、これが、「ラジオのつどい」であります。意見の交換は、座談の形式になる場合もあります。討論の形式になる場合もあります。前者は、音楽やドラマの放送などを中心に行われる「つどい」などにふさわしく、楽しい一時を過ごすことをおもな目的にした場合であります。後者は、放送の内容を、直接に実践生活の向上に資するためにとりあげる場合で、政治や経済に関する問題、道徳や宗教に関する問題などが論ぜられるような場合などです。また時には放送そのものを研究的にとりあげて、放送者のことばづかいや、声の出し方について批評したり、放送討論会などでは、その討論の進め方について論じることが目的としたりする場合もあります。こう考えてくると、討論の形式を取るような「ラジオのつどい」が、ことに有意義な「つどい」であると思ひます。

「ラジオのつどい」は、また、集まる人、集まる場所によつて、あるいは、家庭での、あるいは学校での「つどい」が考えられましよう。もちろん、私たちの生活は、私たち自身が作り出してゆくものです。ですから、「ラジオのつどい」もまた、私たち自身の手で、最もよいと考えられるものを作り出せばよいわけです。こゝでは、ほんの手びきとして、こんな方法もあるという程度の、一つ二つの型を述べてみましよう。

何事もそうですが、一つのこと私たちが生活の中にとり入れられるためには、そのものが気軽に実行され、楽しく、そしてだれにも遠慮のいらぬものでなければなりません。「ラジオのつどい」



もその通りです。家庭での「ラジオのつどい」は、この点最も好都合だと考えられます。家族の人たち、あるいは、親しい友だち、こういう人を中心として、のび／＼としたふんいきの中に、「ラジオのつどい」を作ってみましょう。

あなたがたが、その計画を立てたら、おうちのかたや、あるいは学校の親しい友だちなどに誘いかけてごらんなさい。きつと幾人かの人にはそれに賛成してくれるでしょう。討論の効果をあげるためには、むしろ、それ／＼違った意見を持つ人の集まることを望ましいのです。違った意見をお互が考えあつたのちにこそ、きつとよい結論が生まれてくると思います。

人数は、四人でも五人でも結構ですが十人前後がよろしいでしょう。多くても、十五人までだと思われまふ。場所も、それ／＼の家庭を持ちまわりに行ってみたり、司会者も、いつもきまつた人ではなく、そのたびごとに変わってもよろしいでしょう。そして、時には、専門家を招いて指導を受けることも、たいへん結構です。また、会員が経費を出しあつて、軽いお茶やお菓子を用意することも、この「ラジオのつどい」を、より効果的に、なごやかにする一つの方法だと思ひます。こうして、ごく手軽に開くことができるところに、家庭での「ラジオのつどい」の長所があるといえまふでしょう。

学校で行う「ラジオのつどい」は、一番簡単に実現されまふでしょう。学校でいっしょに放送を聞くことができれば、そのままその教室で討論会を開くことができます。もし学校でラジオを聞くことのできない時には、先生にある一つの放送題目を選んでいただきます。生徒は、その放送を、家庭で、おうちの人といっしょに聞き取り、その放送の要点を記録して、あくる日学校に持って行きます。そして、それにもとづいて討論が行われるわけです。この時、司会者は必ずしも先生である必要はありません。

せん。そのたびごとに、選ばれた生徒が司会者となることによつて、すべての人が司会者としての技術をみがくことができます。学校に集まつて、いきなり討論にはいってもよいわけですが、次のようなやり方も考えられます。すなわち、生徒は、家庭において、簡単な「ラジオのつどい」を行い、そこで自分の考えをまとめて学校に來ます。教室において、学級の中の小さなグループで一通り話しあつて、更に自分の考えを練りあげ、次に、めい／＼の意見によつて、グループを編成しなほして、新しいグループ間の討論にはいるというやり方です。このようにして、かっぱつな議論をやりとりすることによつて、互に反対者の立場を考慮しながら、より正しい判断を導き出そうとする民主的な態度を養ふことができるのです。「ラジオのつどい」のための放送種目は、学校での「つどい」を予想して、学校放送などが用意されていますが、必ずしも、それと限定することもないでしょう。

#### 「ラジオのつどい」の進め方

座談形式の「つどい」の場合には、特にこと／＼しい方法もいらなないでしょうが、討論、すなわち一種の討論の形式をとつて、研究的に「つどい」を進めてゆく場合は、組織的な方法をとつて、能率的にやつてゆくことがたいせつです。

それには、まず、仕事を幾人かの人に分担してもらふことが必要です。たとえば、記録係・書記・進行係、それに司会者などがそれです。こういう役目を持った人が、積極的に「ラジオのつどい」を進めてゆく時、「ラジオのつどい」はじょうずに導かれてゆくと思ひます。

記録係になつた人は、「ラジオのつどい」の記録をつかさどりまふ。「ラジオのつどい」の日記を作つてこれを保存し、その日記には、その日の「ラジオのつどい」に参加した人の、ひとりひとりの意



見を要約し、記録しておきます。おしぜいの会員があるところでは、それ／＼発言する人に、一定の持ち時間を割り当てる必要もありましょう。これは司会者がする場合もありますが、記録係が、やることもあります。討論が終れば、一應その記録を全員に読んで聞かせ、その記録をもとにして、その日の「ラジオのつどい」の意見をまとめあげ、書記の手に渡します。

書記は、「ラジオのつどい」の参加者と放送局とを直接結びつける役目を持ちます。「ラジオのつどい」で行われた討論や、放送局に対する質問や、希望意見その他の成果を取りまとめ、放送局に送り、放送局との連絡をとります。

進行係になった人は、会員の出席簿を作ったり、「ラジオのつどい」の日を会員に通知したり、会員が毎回熱心に「ラジオのつどい」に出席するように勧めたりします。

一番重要な役は、なんといっても司会者です。「ラジオのつどい」を開会し、また閉会を宣するのは司会者です。そしてその間、人々の討論に秩序を興えて、結論に導いてゆきます。

それゆえに、すぐれた司会者を求めることが「ラジオのつどい」を成功させるのに最もたいせつなことであるといえましょう。そこで、すぐれた司会者ができるまでは、もし、その「ラジオのつどい」の会員のレベルが同じであるならば、会員が順番に司会者になることによって、最も司会者として適した人をさがし出すことができると思います。また、司会に慣れるために、すべての人が司会者の経験を持つようにすることも、学校などの「つどい」では必要になってきます。

司会をじょうずにするには、どうしたらよいでしょうか。司会者はあらかじめ、その討論の問題を考えておかなければなりません。そして司会者の役目は、いかにして全部の者の意見を發表させるか

ということにあるのですから、司会者が自分で長々と話したりしてはいけません。内気な人にしやべらせたり、また反対におしゃべりをだまらせたりして、巧みに、その日の主題について討論を進めさせてゆかなければなりません。討論が激しくなるにつれて、互に悪口になったりするのはいけません。立場の違う者どうしが、自分の意見を強く主張するために、熱を持つてくることは自然の勢いであり、また決して悪いことではありません。しかし、いたずらに他人の意見に耳を傾けなかったり、それを十分考えに入れなかったりするほど狭量であってはなりません。会議で、出席者の意見を完全に一致させるということは、必死でもなければ、望ましいことでもありません。会員の中には、意見が違っても争うことはしない、という人もあります。このような態度は、つまらない議論が長引くことを避けるにはよろしいのですが、その人の消極的な気持や、討論に退屈したことにもとづいているのであったら、決して望ましいとはいえません。こんな態度は、とかく、討論の主題がはっきりしない時に起りやすいものですから司会者は、会員のすべてによくその主題をのみこませるようにしなければなりません。

そのためには、一時に問題を幾つもとりあげてはいけません。問題の中心は常に一つに限定し、発言者が主題を離れないよう、注意していなければなりません。議論が混乱した時は、司会者が発言者の意見を一々要約して、他の人に、はっきりさせ、たとえば「それで、結局、あなたの言おうとするのは、どういうことですか。」とか、一前の人の意見に賛成なさるのですね。」とか、「反対の御意見ですか。」とか、また「たゞ今、問題になつてゐる点から離れてゐるようですから、そのことは、あとで考へることにしてしましよう。」とか言つて、討論にすじ道をつけることが必要です。



発言者が、ラジオの講演者のことばを引用した場合、誤って引用しないように注意することも司会者の役目です。また、討論が、ある問題にぶつかって進行しない時、その原因を確かめ、参加した人の知識が不足しているような場合は、そのことを明らかにして、それを今後の研究問題として残すことを宣し、いたずらに時間を浪費しないこともたいせつです。

司会者は閉会の時間を、はじめにはつきりきめておく方がよいと思います。その時間が来ても、なお論じ盡くしてはいない、まだ言い足りない、という感じの残っている方が、退屈な討論会よりもかえってよいのです。その方が次の「ラジオのつどい」に対する熱意もわいてくるというものでしょう。これらの点をいつも注意して、常にかっぱつな討論がくり返されるように導くのが司会者の役目であり、また「ラジオのつどい」そのものの目的でもあるわけです。

討論を終える時に、司会者は、自分のメモによって、自分で、あるいは記録係に、記録を読みあげてもらって、討論を総括します。放送者の意見と、参加者の討論の結果とが対立したり、一致しなかったりした時は、その点をその理由とともにはっきりさせます。参加者の間で意見がくい違つた場合も、その相違点を明らかにしておくことです。もちろん、結論を得ることは望ましいことですが、必ず結論を出さなければならぬことはなく、それよりも、討論のすじ道を明らかにすることの方が、いっそうたいせつなことです。

「ラジオのつどい」にも、し指導的立場にある人、たとえば学校で行われる時の先生のような方がいあわせておられた場合には、閉会の前に、その人の批評や感想を聞くことも、当然考えられることです。

### 報告書の作製

「ラジオのつどい」のあとでは、ぜひ、報告書を作つて、放送局に送るようになりたいものです。放送局は、常に聴取者の意見を求めており、それによって、いっそう価値ある放送をするよう努力しているのです。私たちは、討論の結果を報告書にまとめ、放送局に送つて自分たちの意見を伝え、また疑問があれば、その解答を求めたりするのです。こうして放送当事者と、聴取者が緊密に協力し、一個の機械にすぎないラジオを生かしてゆきたいと思ひます。

討論会の進行中によく記録をとり、会の終つたあと、すぐそれを整理して報告書を作ります。報告書には、討論の要点を質問の形で書き、おもなる討論の経過を述べ、結論を正確に簡潔に示すようにします。この場合にもたいせつなのは、結論の出て来たすじ道であつて、結論そのものではありませぬ。前に述べたように、いろ／＼の意見の対立や疑問および希望意見などが、報告書にはつきりと書かれておく必要があります。

### 研究

- 一 われ／＼の生活をよくするためにラジオを利用するには、どういう方法があるか。
- 二 「ラジオのつどい」の目的・組織、その進め方、どういふ放送を選べよいかについて研究し、われ／＼の学校でも「ラジオのつどい」をしよう。
- 三 「ラジオのつどい」の司会者の役目をよく研究して、一般の討論会の進め方を反省しよう。
- 四 「ラジオのつどい」の記録のとり方、報告書の作り方を参考にし、いろ／＼の会議の記録や報告書の作り方を練習しよう。
- 五 ラジオの発達について調べて、簡単な論文に



まとめてみよう。

六 学級日誌・学校新聞などの中にも、ラジオ欄

を設けよう。その欄には、どんなことを載せたらよいか。

## 二 随筆

随筆は、またエッセイとも言い、小説や戯曲や詩歌とともに、文藝作品の一つの種類である。したがって、「随筆」という書名は持つていても、江戸時代の、單なる事実を書き集めたようなものは、今では、随筆とは考えにくい。随筆は議論とか論説とか研究報告とかいうような、堅苦しいものとは異なっている。冬ならば、暖かい日ざしをいっぱい受けた校庭の芝ふの南側の一隅に腰をおろして、夏ならば、緑したる木陰にいすを寄せて、親しい友だちとうちくつろいで、心おきなく語りあうことばを、そのまゝ筆に移したようなものが随筆である。興が向けば肩のこらない程度の理屈も言うし、勝手なきえんも吐くことになる。軽いおかしみもあればほのかなあわれもたゞよっている。語るところの題目は、天下國家の大事はもちろんのこと、学校内に起ったいろ／＼のことがらでも、興味深く読んだ書物の批評でも、友だちのうわさ話でも、あるいはまた、過ぎ去ったことどもの思い出でも、心に思い浮かぶまゝのよもやまの話を、即興の筆に託した文章である。それゆえ、随筆というものは、だれにでも容易に書くことのできるものである。そして、このようにして書きためた文章を、あと／＼になつてまとめてみると、自分のたどつてきた心

のよい立つ姿が、その時々々の環境に應じて、文字となつて記録にとゞめられることになるのである。このような随筆を書く場合に、いちばんたいせつなことは、書く人の人がらかなるべくはつきりと出るといふことである。随筆は、その本質から言つて、記述でもなければ説明でもなく、また、議論でもない。事実の正しい報道といふことを主眼とする新聞記事が、記者その人の個人的、主観的の調子を出すことを避けるのちやうど正反對に、随筆は、それを書く人の人がらがはつきりと出るところに、そのおもしろさがある。どんなことについて書くにしても、それが書く人の心を通して、その人のものとなつていなければならぬ。書いた人のおもかけが浮き出していなければ、随筆としてのおもしろさはほとんどなくなつてしまう。

戯曲や小説のように、筋のおもしろさとか、作中人物の性格を描くための苦勞とかがなく、また詩歌のように、藝術的な技巧にほねをおることもいらぬために、過去においても今日においても、いろ／＼な人によつて、多くの随筆が書かれてゐる。一口に随筆と言われるものでも、書く人により、書かれることによつて、実にいろ／＼な姿を持つてゐる。なんらかの知識を興えようとするようなものもあれば、情緒豊かなものもあれば、哲學的論文のようなものもある。こゝに載せた作品も、それ／＼かなり趣が違つてゐる。これらの文章を読むことにより、随筆というものが、どのようなことからいつて、どのように書かれるかの一端を知ることができるであらう。われ／＼も、いろ／＼の題材について、自分の見たり聞いたり感じたりしたことを、このような文章に書いてみよう。



「一」すゞめの話

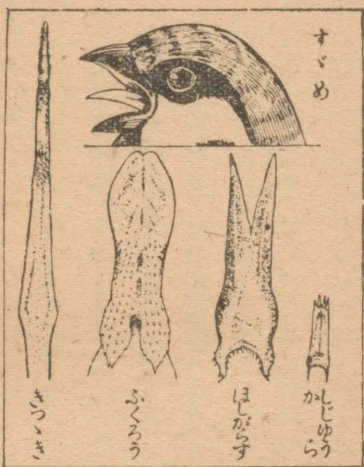
内田清之助

われ／＼にとつて昔なつかしい、「舌切りすゞめ」の話は、のりをなめられた欲ばりばあさんが、憤然、すゞめの舌を切つて放すところに発端する。

ところで、読者諸君はすゞめの舌を御存じだろうか。人間の様な舌がすゞめについていると思ふと大まちがいである。すゞめの舌は、人間のそれのように厚い肉がついたものではなく、薄くて堅い、やりの穂先のようにとがった舌である。

一体、鳥の舌は総じて薄くて堅いものであるが、形は鳥によつて雑多である。中には、ペリカンやこうのとりのやかわせみなどのように、大きなくちばしを持っていて、食物をまる飲みにするような鳥では、ほとんど舌がないようなものもある。しかし、一般には鳥には手がないから、くちばしが手のかわりとして、獸の口より以上に用を弁ずることが多く、また舌で食物を味わうことは獸ほど発達していないが、そのかわり、獸よりはよけいに舌をいろいろの用に使うから、食物のいかんによつて、それに対応するように、舌の形もさまざまにできているのである。だいたい、やりの先のように三角形にとがった長い舌であるか、中には、ほしがらすのごとく、舌の先がへびの舌のように二つに分かれていたるものもあり、やまがらやしじゅうがらのごとく、小さな虫の卵を食するに都合のよいよう、舌端が、あたかもフォーク状に四分されているものもあり、ふくらうの舌のごとく、表面一帯にとげがはえていたるものもある。かと思ふと、きつ／＼のときは木の幹の中に潜む虫を引き出すために、舌が長く、虫のはいつていた穴の奥までつゝこめるようになっており、しかもその舌の先に、捕魚用

鳥の舌



のもりのように、うしろ向きのとげが数本はえ、虫をそれへ引つ掛けてする／＼と後方へ引つ張り出せるようにできている。かように形はとり／＼だが、薄／＼な堅い舌であることは共通で、獸の舌とはだいぶ趣を異にする。

鳥の舌はいろいろの働きをするものだが、たゞ、人間におけるように、ことばを話す際に舌が音声の変化に役立つがごときことはない。鳥のうちでも、おうむの舌は割合に厚くて肉質で、獸の舌に近いけれども、それだからおうむは人まねがうまいのだと思つたりすると大まちがいである。きゅうか

んちようは、おうむ以上に人語を巧みにあやつるか、舌は堅くて薄い。それから考へても、おうむの舌は言語と関係のないことがわかるのである。

舌切りすゞめの話にもどる。欲ばりばあさんがすゞめの舌を切つて放したことを聞いた正直いさんは、惻隱の情に堪えやらぬまゝ、すゞめを見舞うために山の方へすゞめのお宿をたずねて行くと、竹やぶからすゞめが「ちゅうちゅう」言いながら出て来る。こゝでまたちよつとあいの手を入れるが、「竹にすゞめ」と言つて、竹やぶにすゞめはつきものようになってゐる。実際、すゞめは竹やぶに多いのであるが、年じゅう竹やぶに住むのではなくて、夕べのねぐらにするのである。それも、年じゅう、ねぐらにするのではない。だれも知るように、すゞめは人家の屋根裏やかわらの間、煙突の穴の中などのすきまに、わら／＼木の枝で巢を作る。つまり、人家附近に多いのである。すゞめが営巢するのは



春から夏の間であるが、その間は人家に集まって巢を作るから、その時期には村や町の人ごみにいるわけである。それが秋になってひなが生長すると、ひなを引き連れて田畑の附近に群れついで、いわゆる群らすゞめになって、実った稲の穂をつゞき散らすようになる。この時期になると、今度は群れたまゝ、夕方には大きな竹やぶにはいつて夜を過ごすようになる。すなわち、すゞめは温暖の時期には人家のそばにあり、秋になるとたんぼや畑の方へ移動する。同じ村の中を向こうへ行ったりこちへ来たりするだけであるが、とにかく移動は移動である。これが「渡り」と称する、鳥の神秘的現象の基本となるのである。うずらなどはもう少し大きな移動をする例で、北海道や東北の原野で巢を作り、産卵育雛するが、ひなが生長すると、それらの地方には冬は食物が少なくなるから、四國・九州等の暖地へ南下して冬を越す。こうなると、もうよほど渡り鳥らしい。かものごときになると、もつと渡りの範囲が廣く、日本より北の方の國で繁殖し、秋になると日本へ渡る。こがものような割合に小さなかもは、カムチャツカ半島一四の川べりのような所で繁殖し、秋、日本へ渡来して、川や沼などの暖かい場所に生活する。これがほんとうの渡り鳥である。すゞめはまだ渡り鳥とはいえないが、その生活状態をよく見ると、渡り鳥のすることを小規模に行っているのである。

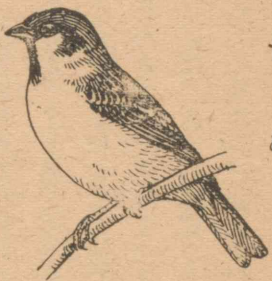
さて、舌切りすゞめの話にもどり、すゞめは、正直じいさんにすゞめ踊りを見せたり、ごちそうをしたりして欲待した末、大小のつゞらを取り出して、どっちでも好きな方をみやげに持って行くように言う。欲のないじいさんは、軽いつゞらをもらって帰り、あけてみると、中から宝物がたくさんに現われる。そこで今度は欲ばりばあさんが出かけて行って、大きいつゞらをもらって帰り、あけてみると、さまざまの化け物がとび出してばあさんを苦しめる、という御承知の大團圓である。

このおとぎばなしでは、欲ばり者はすゞめから悪い物をもらい、正直者はよい物をもらって、めでたしめでたしとなっているが、それは別として、実在のすゞめは、人間によいこともすれば悪いこともするのである。前に述べた通り、すゞめは夏と冬で生活が違うが、秋はたんぼで食餌をとり、穀物の穂をしきりについばむから、農家のきらわれ者となって、かゝしなどでその來襲防止に大わらわの努力が拂われる。たしかに困った存在である。ところが、人家に巢を作る夏のころは、ひなを育てるために動物質すなわち虫を多量に食べる。ひなの食物は動物質であるが、このころは親すゞめの食物もやはり動物質で、春から夏にかけてはおもに虫を食する。すなわち、田畑で麦その他の作物を荒す害虫を平らげるのであるから、この時期のすゞめは、農家にとって非常に有益なのである。すゞめが大いに虫を食ってくれると、秋の作物がよくできる理屈になるのである。しかし、そういう有益な面はたいいていの人は知らぬから、すゞめを目のかたきにして追いまわす。すゞめにとっては、はなはだもって聞えぬ話なのである。

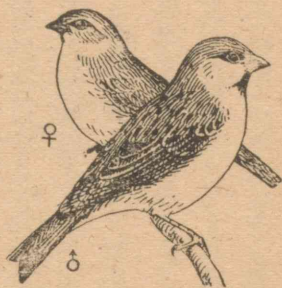
昔、プロシアのフレデリック大王は、さくらんぼが大好物で、庭園に櫻の木が多数植えてあった。すると、すゞめが来てはさくらんぼをついばむので、いたく大王の逆鱗げきりんに触れ、王様のことであるから、すぐに命令を出してすゞめ狩りをさせた。その結果、最初の年はその附近で三十八万羽のすゞめがとれ、二年めも三十八万五千羽というおびただしいすゞめがとれた。これだけすゞめが減ったからには、さくらんぼがさぞよくできることであろうと喜んでいたのであるが、次の年は毛虫がおそろしく発生し、櫻の木がまる裸に食われてしまったということである。これはすゞめの有益性をよく証立立てる挿話である。



すゞめ



にゆうないすゞめ



すゞめは舌切りすゞめの話でおなじみであるのみならず、鳥の中でも最もよく人に知られているが、日本には、も一つ、すゞめの類でにゆうないすゞめというのがある。よく似ているために、普通のすゞめと混同されがちであるが、この方が色が少しきれいである。一体、鳥は雌雄で外観を異にするのが普通であるが、からすやすゞめのように、外から見ただけでは雌雄の区別のつかぬものもあるのである。しかし、すゞめでもにゆうないすゞめは雌雄で色彩を異にする。

にゆうないすゞめ、漢字では「入内雀」と書く、これには妙な話がある。昔、宮中に仕えていた藤原実方なる人が、罪を犯して北の國へ流され、都の空を恋いながら、ついに帰参の望みかなわず、配所の露と消えた。その霊が化してすゞめとなり、はる／＼宮中のお台所に飛んで来て飯をついばんだので、入内雀と呼ぶようになったというのである。「入内」は宮中に入る意味だという。しかし、むろんこれはとりとめもなく単なる傳説である。本居宣長の「玉かつま」に「にふないといふすゞめ」なる傳説がある。本居宣長の「玉かつま」に「にふないといふすゞめ」にふないは新嘗といふことなるべし。新稻を人より先にまづはむをもて、しか名づけたるなるべし。」と説かれている。もちろん、この説の方がほんとうだろう。

すゞめは日本人にとって近しい鳥であるばかりでなく、世界じゅうどこへ行っても、人間につながっている鳥である。たゞし、日本のとは多少種類が違い、たとえば欧州のすゞめは、日本のすゞめそ

のまゝの形態ではない。

欧州のすゞめは欧州全土に分布しているが、アメリカには、もと、すゞめはいなかった。しかし、十九世紀の中葉から二十年間に、千五百羽のすゞめが北米に放たれた。それは当時、アメリカでこれの木が毛虫の害をこうむることはなはだしかったので、毛虫たいじのためにすゞめを放したのであるが、これが成功して非常な勢いで増殖し、今日では北米の東部一帯に広がっている。ところがこのすゞめ、これの木の毛虫は盛んに食ってくれたが、穀物の方にもえらくくちばしを出すので、今では害の方がひどくて困っているような始末である。自然の攝理は実に微妙であって、そういうふうには、動物をよその國から輸入したりすることは、なか／＼人間の思うようにはならぬむずかしいものなのである。

欧州のすゞめはハワイにも多い。ハワイのはアメリカから輸入したのがふえたのである。ニュージーランドにもふえている。土地に対する適應性が強いので、どこにもふえる。一年に数回もひなを育てるし、巢は人家を借用してすましていて、食物は虫と作物の両方使いだし、生活力はすぶといくら強い。駅などでまっ黒なすゞめを見かけることがあるが、これは汽車のばい煙の盛んにかぶるような所に巢をくうからで、ほかの鳥の住めぬような所にも平気で住む。化学の実験室にある、毒ガスを抜く煙突の穴に平気で営巢した例さえある。

(ばあどろあ)

研究

一 この隨筆で、「舌切りすゞめ」の話は、どう 利用されているか。隨筆の進め方の一つの方法



- として話しあつてみよう。
- 二 この随筆の内容を、簡條書きにしてみよう。
- 三 鳥の舌と、人間の舌とは、その働きにどんな違いがあるか。
- 四 「渡り」とはどういうことか、すゞめ・うすら・かも・つばめ・がんなどについて調べ、説明してみよう。
- 五 「土地に対する適應性」、「すぶとい生活力」とはどういうことか。
- 六 次のことばの意味、またこのようなことばの使い方などについて話しあつてみよう。  
のりをなめられた欲ばりはあさん

〔二〕引っ越し

北原 白 秋

それはついきのうのことだ。しかも暑い日中でね。いよ／＼龜井坊から引き移るといので、私たちはあわれな私たちの家具（それも詩集や花びん、それに簡単な食器類ぐらいただ。）を車の上にまとめて、その上にまっ白いてっぽうゆりの一はちを載せてもらつて、よぼ／＼の運送屋を先に出した。妻と助けに来てくれたばあやとにあとのそうじを任して、車のあとから私はたつたひとり、こわれかゝつた小鳥の巢をポケットに入れ、青銅の燭台の、大きなつり鐘形のガラスのかさばかりを一對両わさ

にかゝえて、あの長い、市川の長い／＼橋を渡つて行つた。ガラスがびか／＼日に光るのではら／＼して、その橋を渡りきると、畑はなすやかぼちゃの花盛りだ。もうそこは昔の葛西領、今の南葛飾郡となる。四方のながめは更に廣々となつて、明かるい九天井の下で、お百姓たちは肥料をふりまき、みそはぎの咲く在家の庭から、にわとりや犬の音が聞え、子供は泳ぎ、すゞめはすゞめで、いたるところのもろこしの葉に、翼も頭も光りかえつて、飛んだりかじりついたりしていた。そうしてまたつぼんだばかりのれんげや、見わたす限りの青い田のはるか向こうに、まっ黒くなってあがる本所あたりの煙が見え、そうしてあぜのとねりこの下には、くそ舟が休んでいたり、裸の人間が飯を食つたりしていた。私はみち／＼、これはいい所に來たと思つた。同じ葛飾でも、東と南はこうも明かるさが違うものかと思つた。赤土のあの原つばに比べると、こちらはすつかりまっさあで、みず／＼しくて、稲葉を渡る肥料のにおいまでがぶん／＼して氣持がいい。全く新鮮だ。歩いていると、両わきのガラスのかさかまにひらりとおりた人を見ると、この家の主人だ。千駄木の先生をつくりの顔をしている。前の日、貸し間を見に行つた時、その人はほし草商で、秋になるまではいつもぶら／＼遊んでいますなどと、にこ／＼して話した。こののんきななかの鷗外先生が、あい変わらず私の顔を見てにこ／＼した。「もう引っ越して來ましたよ、実はさよう御返事する約束になつていましたよ、めんどろですから、さっそく荷物を出してしまつたところです。お貸しくださるでしようね。」と言つと、「どうも驚きましたねえ。」と、またにこ／＼した。「なんでもかつぎこんでしまいますよ。」と、私が笑つと、「どうもどちらが貸すんだか貸りるんだかわかりませんねえ。のんきだなあ。」と、たばこに火をつける。

- 側隠の情に堪えやらぬまゝ  
ちよつとあいの手を入れる  
どいう御承知の大團円である  
めでたしめでたしとなつて  
目のかたきにして  
はなはだもつて聞えぬ話  
逆鱗に触れ  
配所の露と消えた  
くちばしを出す
- 七 人間と深いつながりのある動植物に関する昔話に、どんなものがあるか、調べてみよう。そして、それをもとにして隨筆を書いてみよう。



私ものんきだが、この人もずいぶんのんきだ。「もう荷物はたぶん着いています。」それは、とさすがにわけて、それではお先にと、またかけ出した。白状するが、実は私も前の日その離れを見に行っただけで、まだ確とした約束はしていなかったのだ。

小岩村の小岩田の三谷、そこにたった一つ赤い郵便箱のさがつた家、前は柴又と千住の別れ道、石の地蔵が一体立って、すぐ下手に橋がある。これがやっぱり地藏橋、橋の横手のこの草ぶきの家を遠くから見ると、南に柳がしだれてふぜいがいい。店にはラムネやくだものや雑貨品が並んで、上がりがまちには腰かけた村の若い衆たちがたばこでものんでいると、外庭にはなくてはならぬようにちやんと掘り抜き井戸がある。井戸には水がなみ／＼とあふれて、あふれた水が板張りの流しにまわりからこぼれている。そのかたわらに紫の花あやめがあつらえむきに咲いていて、上にそまつな竹だながある。まるで光琳模様そのまゝだ。その家を、前の日、川を渡って見に来た時のうれしさつたら。

「離れをお貸しなさるそうぞうで。」と尋ねると、だれかが井戸の右手をさして、「そちらのひらきがあるいるだ。」と言う。まわって行くとたんぼに出る。すみっこには小さいかわやなぎが一本、白い葉裏をかえしている。そこに黒い門があつて、中にはいると芭蕉庵ばしやうあんといったふう。少し陰気なようだが閑静なものだ。門からまきの木、たいざん木、二、三の盆栽物と、続いてみんな青い。まわり縁の前に一本のさるすべりがある。それもまだ花が咲くにはまがある。例の青い柳のしだれてたれかぶさる下には、さ／＼やかな古池がある。池には柳河やなぎがわのいわゆる、がめのしゅぶだけが一面に青くはえて、そのふちには、臥え草やまこもが茂つて、どこからか庭だか池だか境がつかない。こわれてたおれか、つた向こうの竹がきの上から、つる草や稲の葉かのしか、つてきて、その上から廣々とした野っ原

や、遠い林や人家さえ見える。西日がさすのか、その方のひさしによしすが一枚さがっている。よしずを透かして、ひのき葉や青いたちばなの木が見える。その実も、葉隠れにやつぱり青い。どうもいよいよ古池の芭蕉だと思つと、なんだか少々くすぐったくなつたが。

その家の柳がいよ／＼見えてきた。急いで行くと、荷車が先へ来てあやめのそばに休んでいる。三谷の鷗外先生も白いてっぽうゆりのはちをおろしながら笑つている。もうしめたものだ。一とう／＼来ましたよ。」と笑つと、店にいたみんなも笑う。これが私の引越した。

門からはいって、障子をすつかり取りはずしてもらうと、すてきに明かるくなつた。きのうはなんだかさびれすぎて陰氣くさく見えたのは、雨の前で、全く空が曇っていたせいかもしれない。このふんでは安心だと、小鳥の巢を一番に座敷へ投げ出すと、その中からまっかなダリアが疊にころげ出した。疊も新しい。

へやは二間しかないが、八疊の方には床の間も違いだもあるし、次の六疊には、冬の用意に炬も切つてある。小さい台所も別についていて、今度はすわつたまゝで御飯がたけるようになってい

これで私も落ち着きますと、あとから来た妻の章子あやこも喜んだ。床の間に赤表装の佛足石の石のすり紙の軸をたつた一つ掛け流して、ひとがせつせとあと片づけをして

している間に、すばやく外へ逃げ出した私のずるさを笑つてくれ。どうもこちらはいい、すてきめっぽうかいに明かるいね。かぼちゃはごろ／＼畑に寝ころがっているし、かわら焼きの煙はあがるし、緑のキャベツは生き物のようにはじけかえているし、虫は鳴くし、人はじよきじよき草を刈つたり、かついで歩いたりしているし、……私は真間ままから来て、溜飲のりぐん



のさがったような気がした。

しかし、それよりもまず私の驚いたのは、向こうの鴻の台の上からひく／＼わきあがるまっ白な入道雲のかたまりだ。それは目に入る何物よりも一番強く光り、一番力があり、一番奥底が知れなかった。それが見てるまにせり出して、一大ヒマラヤ山脈を現出する。と、奥の／＼銀灰色のかけから、かすかな日中の雷鳴がころがって行く。すばらしいじゃないか。天の景色は豪放で、かれらのほしいまゝだ。その上はまっさおで、鳥が一羽飛んで行った。土手へのぼって見ると、江戸川が洋々と流れている。川向こう一帯の連丘は、雲の峰におしつけられて低くなり、前には千疊敷きの青よし原が、しんとしてなんだか騒いでいる。よしきりだ。聞いてみると羽ばたきの音まで聞えそうに澄みきってくる。しかも日光は水面いっばいに反射して、あしまにもやったくそ舟まで、銀象眼の屋根舟のように、小さく上手に光って見える。その遠くに巨大な煙突が二本、煙を黒くふきあげている。

ぼっぼっぼっぼっ……と、川蒸気が波をけ立ててのぼって行く。続いて白帆が幾つも幾つものぼって来る。

草の中へあお向けになって目をみはっていると、なんだか涙がこぼれ落ちそうになる。目をつぶるとつく／＼自分がいとおしくなる。じっとしていると、どこやらで人間が大きな声で話している。笑い声も聞える。すゞめも騒いでいる。せみも鳴いている。

こゝは人間離れがなくていい。こゝの畑に働いている人間は、みなこゝの地面にびったり合っている。野菜も人間もみな地べたからわき出したまゝだ。私は再び土手へ上がって三谷の方を振り返った。

お、廣々とした葛飾の野、見える限りの青田には、こうの鳥のように百姓がとままっている。大きなあかい太陽が西の空にまわりはじめると、その点々は火のように輝き、風は渡る。もう日暮れにもあるまい。たゞ明かるい一田の野原から、人家の煙がにぎやかにあがりはじめ、東京の方でゆるやかな汽笛がほえ立てた。

あゝ、その親しい風景の中に、私に一番近く、柳がしだれ、細々と紫の煙を立てはじめた草ぶきの家、あれこそ私の家ではないか。妻がもう夕げの煙を立てている。私はたまたまなくなって、なすやもろこしの間をかけ抜けた。

紫の煙、紫の煙、私は私たちのこの畑の中の新居を、その晩、紫烟草舎と名をつけた。

その紫烟草舎に蚊やりがなびく。香のにおいもかすかにけむる。青いかやをつらせると、古池のまこのかけから小さなぼたるが来てとまる。涼しい、夜は涼しい。

いすまいだ。私の思った通りだ。私はきょう一日、どろ足のまゝで地べたをべた／＼歩きまわった。いたるところ青田とはす田続きである。田のくろにはとねりこやならの木が光ってそよぎ、何鳥のふんか白く乾いた板橋もところどころのみぞにかゝっている。そうして日盛りはくそ舟が幾つも幾つもの網をひいて、はるか青空のきわまでのぼって行く。

朝早く起きて、井戸ばたで、紫のあやめを見ながら顔を洗っていると、まだ露にぬれたいなかの一本道を、郵便脚夫が手を振って来る。晝近くなると、とうふ屋も通れば、時おりには、柴又さしてダリアやあじさいをいっばい載せた花屋の車も、前の土手を通って行く。江戸川べりの川舟に行けば、新しいびん／＼するこいやなますが買える。肉類その他は市川まで十二、三丁行かねばないが、かんづ



めでさせばすむ。野菜はそこらじゅうの畑からまっさおのやつをいでもくれる。東京には近い。住  
こなれてみたら、さほど不便も感じない。不便でもない、私はこの地面にびったり合った生活がした  
い。百姓たちにまじって、生まれたまゝなあけっぱなしの、そぼくな、みず／＼しい、眞実の人間ら  
しい生活がしてみたい。  
(葛飾小品)

研究

- 一 この文の書かれている季節はいつか。季節の  
感じのよく現われているところを指摘せよ。
- 二 筆者の人がらや、平素の生活のしかたにつ  
いて想像してみよう。
- 三 「千駄木の先生」とはだれのことか。
- 四 「雲の峰」とはどういうことか。
- 五 「草の中へあお向けになって目をみはつてい  
ると、なんだか涙がこぼれ落ちそうになる。目

- をつぶるとつく／＼自分がいとおしくなる。」  
というところには、筆者のどんな心持が現われ  
ているか。
- 六 色彩や光線についての印象的な描写について  
味わおう。
- 七 簡潔な表現を味わおう。
- 八 この文を、くり返し読んで、調子の上の特徴  
について考えてみよう。朗読のくふうをしよう。

〔二〕 おいたちの記

アンリッファープル

アンリッファープル(一八二三—一九一五)はフランスの昆虫学者である。各種の昆虫の生態を細かく観  
察し、なだらかな文章でつづった「昆虫記」は、わが國でも多く読まれている。

ダイウインが、わたしに、比べものなき観察者という称号を許してくれてこのかた、この形容語は、

こゝかしこからちよいちよい、幾たびか聞かされるのだが、わたしはいまだに、なんでそれだけのね  
うちがわたしにあったのか、いっこうにさっぱりわからないのである。

もしも昆虫のことについてのわたしの好奇心を是認しなければならぬとしたならば、わたしの遠  
慮はなくなってしまう。実際わたしには才能がある。わたしをしてその特殊な世界をしば／＼訪れし  
める天性が、たしかに、わたしには備わっていると思われる。けれども、できるならば、老年期の不  
幸を防ぐために、それはもっともと有益に用いらるべき時であった。

ほんとのところ、わたしはたしかに自分が動物の熱心な観察者であることだけは告白する。それは  
わたしの生活の苦しみでもあり、楽しみでもある。こうした特殊な傾向は、どうして助長させられた  
のだろうか。

わたしは母方の祖父母については、ほとんど知らない。なんでも、みんなの話によると、祖父は、  
ルーエルグの最も貧しい、一小役場の官吏だったそうである。

わたしは父方の祖父母については、かれらの元氣な長壽のおかげで、わたしはふたりとも知ること  
ができた。耕作を事として、一生一冊の本もひもとかなかった人たちだ。それだけかれらがABCに  
親しまなかつた度合は深い。かれらはルーエルグの高原の花崗岩質のやせ衰えた狭い土地を耕して、  
わずかな生計を立てていた。

家はえにしだともみねすおうとの中に孤立して、周囲は遠くまで隣人というものもなく、時々おゝか  
みに見舞われるぐらいで、かれらにとっては、それが全世界であった。

市の立つ日には子牛が連れられて行く近くの二、三の村を除いては、あとは知ることもなく、たゞ



ごくぼんやりと、うわさに聞くだけであつた。この未開な孤独境にある泥炭質の低地は、やわらかい沼地になつて、そこから、にじ色の水がちよろちよると流れ出していた。そして、牝牛に食べさせる牧草が密生して、主要な富を供給していた。夏には短い芝草のはえた斜面で、夜も晝も、羊たちが、また木でさゝえた贅の囲いの中で、掠奪に來る動物の害を受けることなく飼われていた。一とこの草が食い盡くされるに従つて、その囲いはよそに移された。中央に羊飼いの移動するわらの小屋があつた。

びょうを打つた首輪をはめた二匹のモロス犬は、夜、近くの森からどろぼうおゝかみが奇襲しても、安全を保証していた。わたしのひざまで没するような牛のふんの万年床を敷きつめて、この間にコーヒー色のふん汁が光っている。その隣の家畜飼養場には、たくさん動物がいた。あひるがラッパを吹いていた。鶏などが地面をかき散らし、牝豚が乳にぶらさがつた子豚の一族を引きぐしてぶらぶらと言っていた。

祖父は何よりもまず牛と羊との飼養に通じた牧人であつたが、他のことには全くの無知であつた。もしかだが、遠隔の地で、その身内のひとりか、かれが一生一べつをも與えなかつたつまらぬ動物に凝っていることを知つたならば、その驚きはどんなだろう。そのばか者がわたしで、自分のそばに並んで御飯を食べた子供であることを、もしかかれが予知したなら、どんなにわたしの細っこい首筋を引つぱりたいだろう。どんなにはげしくにらみつけただろう。「そんなろくでもないばかげたことに暇つぶしをしてどうなるものか。」と、どなりつけただろう。かれはじょうだんを言ったことのない、いかめしい家長であつた。

わたしは常にかれのまじめな顔を見ていた。かれのついで刈つたことのない髪は、しばしば親指で耳のうしろにかきあげられて、肩の上に古代ゴール式な長髪をたらしめていた。わたしはかれの三角帽を覚えていた。ひざで締める短いズボンを覚えていた。わらを詰めたよく鳴り響く木ぐつを覚えていた。かれは子供のおもちゃにしかたけで、決して、きりくすを飼つたり、あたりのくそ虫をさがし出したりしたことはない。

祖母はまた、田満な人で、ロデーの山地の女たちのふう変わりな帽子をかぶつていた。黒フェルトの大きな円形で、板のように堅く、まん中に指のさし渡しほどな高さで、六フラン貨幣ぐらゐな大きさの形をした物がついていた。あごの下で結ばれた黒いリボンが、優雅ですわりの悪いその丸い帽子を平らにしておくのであつた。

塩づけ物と、大麻と、ひよっここと、乳でこしらえるものと、バタと、せんたくと、子供たちの世話と、一家内の食事のこととが、このおもしろい祖母の考えることの全部であつた。

左のわきには麻くずを巻いてつむざおを立て、右手にはつむひを持って、親指を時々つばでしめして、敏捷に動かしてそれをまわしながら、うまずつままず、家事に手落ちのないように氣をつけていた。

わたしの思い出は、特に家族の談笑に好都合な冬の夜の祖母を描き出す。食事の時間になると、おとなも子供も、わたしたちのかたちんばな足の四つついたもみの板の腰掛けに掛けて、長い食卓の周囲に座を占めるのであつた。そこには、めい／＼のおわんにすゞのさじが添えてあつた。

わたしたちのそばには大きな暖炉が燃えていた。その中で、ひどく寒いところは木の幹がそっくり燃



を盡くした。そのりっぱな暖炉のすゝにいろどられた一隅には、相当の高さに石盤板があつて、その上で燈火が燃えていた。一番よくあぶらじみた半透明なものの中から選んだ松の木片が、そこで燃されてきた。それは、へやの中に赤みを帯びた、すゝ色な光を投げた。それは火口のついたカンテラのくるみの油を節約するのであつた。おわんがからになつてチーズの最後の一片がなくなると、祖母は暖炉のかたわらの腰掛けに掛けて、またそのつむざちを手に取りあげるのだった。わたしら子供たちは、男の子も女の子も、しゃがんで、えにしだの楽しい火の方へ手をさしのべて、祖母のまわりを取り巻いて、一心に彼女の話を聞くのであつた。彼女はいつも同じような話をしてくれた。けれども、それは不思議な、ほんとにももしろい話だった。

なぜかといえ、しばしばおゝかみのことが出るからであつた。わたしたちを、戦慄させたたくさんの話の主人公のおゝかみを、ほんとにわたしたちは見たいと思つた。羊飼いの祖父は、囲いのまん中にあるわらの小屋の中には、夜はいつもはいることを許してくれなかつた。

憎い動物の話、龍の話、毒蛇の話を食べるほどたくさんしてくれた。そしてやがて、あぶらの木の燈火が最後の赤い色を投げるようになると、労働が興える楽しい眠りにつくのであつた。

家じゅうで一番幼い者として、わたしはからす麦のからを詰めた袋のふとんに寝た。けれども兄弟たちは、わらよりほかのふとんは知らなかつた。

おばあさん、わたしはあなたのおかけをたいへんこうむっている。

わたしが子供のころの悲しみの慰めを見いだしたのは、あなたのひざの上であつた。あなたはたぶんいくらかはしょうぶなからだと、いくらかの労働愛をわたしに傳えてくださった。

けれども、もちろんあなたはおじいさんと同じく、わたしの昆虫熱には関係はない。わたしの両親もそのことにはやはり縁のない人である。母は全くの無學で、教えてくれるものとは、たゞ苦しい生活の苦しい経験を知ることだけで、わたしの傾向の発現が要求するものとは全く反対の立場にあつた。わたしの性質は他にその源をたずねなければならぬと、確信をもつて言うことができる。

わたしはそれを父に見いだすだろうか。やはり見いだせない。勤勉で、祖父のようにできていた好人物な父は、若い時代には、しげ／＼と学校に通つた。父は書くことは学んだが、つゞり字法に関しては許されないほど非常にでたらめであつた。

父は都会に誘惑された最初の人であつた。それだけ父のためにはよくないことであつた。貧しい財産と、限られた才能とを持った父は、生きていくか死んでいくかわからぬような生活をして、町の人になつた山の人の苦しい経験をつぶさになめた。人のよい心は持ちながら、不運に根氣も疲れ、労苦の重荷に苦しめられた父は、わたしを昆虫学に進めるどころではなかつた。父にはそれよりも別な、もつと直接的な、もつと深刻な苦勞があつた。わたしがコルクのせんに昆虫をビンでとめているのを見た時、父は何度かわたしの頭をやさしくたゝいた。それが父から受けた励まし全部なのだ。たぶん父は、そうするよりほかにしかたがなかつたのだ。

貧しい家庭をひとり口でも減らすために、わたしは祖母の手に預けられた。そこの人里離れた所で、かもと子牛と羊とに取り巻かれて、わたしの最初の知のひらめきは目ざめた。それ以前のことは、わたしにはかにもくわからぬやみである。

心の黎明が無意識の雲をほらつて生まれ、わたしに恒久な記憶を持たせるようにしてくれた時から、



わたしはほんとうの生活をしているのだ。わたしはむき出しなかとに、どろだらけにして引きずっているそまつな着物を着た自分自身をしみじみと再び見ている。わたしは糸の端でバンドにぶらさげたハンカチのことを思い出す。しょっちゅうなくしたハンカチ……そしてそでの裏がそのかわりをしたハンカチであった。

ある日、手を背のうしろにまわして、太陽の方に向かって、わたしは考えごとをする子供であった。そのまぶしい輝きがわたしをうっとりさせた。わたしはランプの光に引き寄せられる虫なのだ。わたしは口でその光り輝く輪光を楽しんでいるのか、それとも目で楽しんでいるのか、どちらだったろう。このようなことが生まれ出たわたしの科学的好奇心の問題なのだ。

読者諸氏、笑ってはいけない。未来の観察者はすでに修業をしているのだ。実験をしているのだ。わたしはせいっぱい口を開いて目を閉じた。その輝きは見えなくなった。わたしは目を開いて口を閉じた。その輝きはまた見えだした。わたしはまたやりなおしてみた。同じなことであった。それでよい、わたしは確実に目で太陽を見ていることを知ったのだ。なんと美しい発見であろう。夜になって、わたしはそのことを家の者たちに話して聞かせた。祖母はわたしの子供らしさにやさしくほおえんだ。そのほかの者たちはたゞ笑っていた。

もう一つの発見。夜が来た時、まわりの草むらの中で、何かしらこつ／＼というものがわたしの注意をひいた。それは夜の静けさの中で、かすかにやさしく鳴っていた。何がそんなに音を立てるのであろう。小鳥が巢の中で、びよ／＼言っているのだろうか。見てみなければならぬ。しかも大急ぎで……。そんな時間には、森を出て来たお／＼かみがいるとわたしはいつも聞かされていた。が、と

にかく行ってみよう。だが、そんなに遠い所ではない。えにじだの茂みの向こう側だ。長い間、わたしはじつと様子をうかがっていたが、なんにもうるるところはなかった。草むらが揺られて、ほんのちよ／＼と音を立てても、その声はすぐばたりとやむ。

さてその翌日、わたしはまたやってみた。そしてまたその翌日も……その時は、わたしの執拗な待ち伏せが成功した。ぱっと、手を伸ばして、わたしは歌い手を捕らえた。それは小鳥ではなかった。いなごの一種であった。わたしの友だちはそのものあたりの肉のおいしさを教えてくれた。この時から、わたしは観察によっていなごの鳴くことを知った。わたしの発見は、太陽の話の時のようにみんなに笑われることを恐れて、公開しなかった。

家のすぐそばのその畑には、なんとという美しい花が、いっぱい咲き乱れていたことであろう。それは紫の大きな目でわたしにほおえみかけているように思われた。後になると、そこには花のかわりに、大きな赤いさくらんぼのふさを見た。まずくてその上種がなかった。このさくらんぼは一体なんだろう。その季節の終るころ、祖父はすきを持って来て、わたしの観察していた畑を掘り返した。土の中から幾かごも幾袋も、丸い根のようなものが出て来た。それはわたしの知っているものであった。それは家にたくさんあった。何度もわたしはそれを、草を燃やす中で焼いた。それはばれいしょだ。いつまでもその紫の花と赤い実とをわたしは覚えていた。

このように目を常に動物や植物に向けて、たったひとり、でたらめに、未来の観察者である六歳の小僧は修業していた。白蛾がキャベツに行き、ひおどしちょうがあざみに行くように、かれは花を訪れ、昆虫を求めた。かれは好奇心に誘われて、観察したり、調べたりした。かれの心にはその家族の



知らない才能の芽ばえがあつたのだ。かれは祖先の家になかった種をはぐくんできていたのだ。

(ファブルの言葉——平野威馬雄訳)

### 研究

- 一 ダーウィンが、ファールに「比べものなき観察者」という称号を與えたのはなぜか。
- 二 ファールの目に写つた、かれの父方の祖父は、どんな人であつたか。
- 三 父方の祖母に、ファールは、どんな世話を受けたか。
- 四 「わたしの傾向の発現が要求するもの」とはどういうことか。
- 五 「町の人になつた山の人の苦しい経験」とはどういうことか。
- 六 「心の黎明が無意識の雲をはらつて生まれ、わたしに恒久な記憶を持たせるようにしてくれた時から」とはどういうことか。
- 七 「わたしはランプに引き寄せられる虫なのだ。」とはどういうことか。
- 八 ファールが、最初に好奇心をそゝられた科学的な問題はなんであつたか。
- 九 ファールの昆虫記を読んで、動物に対する、かれの細かい観察力を学ぼう。
- 十 ファールの傳記についても調べてみよう。
- 十一 私たちの幼かつた時分のことを、父母や兄弟などから聞き、自分の記憶を呼び起して、自分のおいたちの記を書いてみよう。

### 三 眞実の表現

私たちが、自分の考えや心持を相手に伝え、相手の心持や考えを受け取る場合、主として

ことばを用いる。しかし、人はいつでも、自分の考えや心持を、正しくことばに表わしているとは限らない。それは、わざと、自分の心持や考えをゆがめて述べようとするわけでもなく、実は、正しくことばを使用することが、なか／＼むずかしいからである。たとえば、自分の考えが、そうはつきりしていない場合がある。それでいて、それをことばによって発表しなければならぬ立場に立たせられたり、発表せずにはいられない衝動にかられたりする。こんな場合に、無理に何か言つたらどうなるであろうか。ことばには一定の形があり、その形に伴つて意味がきまつている。その形にその意味が結びつけられているのは、社会の約束であつて、人が勝手にこれを変更することはできない。ところが、自分の考えそのものがまだきまつていないのに、何かことばを借りて、それを表わそうとするならば、まだはつきりきまつていないものが、何かきまつたもののようになってしまう。そして、必ず、自分の考えとは、どこか違つたものとなつて、相手に傳わることになるであらう。

自分の感情をはつきりつかまないで、それをことばに表わすこともまた不可能である。ひよつとして「こんなことを言つたら笑われるだろう。」とか、「こう言えば人が感心するかもしれない。」などと、雑念が入りこむと、それだけ、自分のほんとうの感情がゆがめられてしまう。特に詩や歌などのような文学を創作するような場合、このようなことが起りやすい。このように、ことばを使うには、その内容である考えや心持を、はつきりと見定めること、それをゆがめないで表現することがたいせつなのであるが、これが決して容



易でないのである。

また、社会が自由であり開放的であれば比較的少ないことであるが、社会が十分自由でなく、開放的でないことには伴った社会的な習慣がわざわざいして、人の言うところを、ことは通りにとると、かえってまちがうことがある。そんなに感謝の氣持もないのに、うや／＼しい態度で礼の口上を述べたりする習慣があると、ほんとに感謝した場合の表現に困るといったような場合も起りうるであろう。これなどは、たゞ單にことばだけの問題でなく、また、ひとりやふたりの努力だけでどうなるものでもない。多くの人が、正しい進歩した社会をつくりあげてゆくことに熱意を持ち、長い年月にわたって力を合わせてゆくのでなければ、解決することのできない問題である。私たちの社会に、このようなよくない習慣があるならば、ことばが私たちの社会生活のすべてに深いつながりを持っていることを自覚して、お互いに注意して、その改善に努力すべきであろう。

こゝには、眞実の表現をもって作歌の根本態度とすべきことを、実例を示しつつ述べたラジオ放送の手記の一節、誠実な生活をまっすぐに歌いあげた詩を中心に、その人の人からに及んだ講演の一節をあげて参考にした。

## 〔一〕 短歌の作り方

土屋 文明

短歌は、一定の形式を持った韻文ではあるが、日本語の韻文としては最も自然のものであるから、作ろうという意志さえある人ならば、なんの準備もなしに、きわめて容易に作ることができるはずで

ある。三十一文字を並べることなどは、決して窮屈を感じさせるものではない。日本人は三十一文字形式、すなわち短歌の形式には、幼少の時からいろ／＼の機会に親しんできていたので、それはすでに形式にして形式でないほどになっている。日常生活の感動を、あるいはまれに遭遇する人生非常の激情を、心におさえきれないことばに表わそう、すなわち詩にしようとするれば、自然と短歌形式をとるくらいである。それなのに、短歌を作るのがおっくうになるのは、短歌には特別のことばづかいがあったり、特別の内容があったり、特別の修辞法や作法があったりするがごとく考えるためである。もしかすると、そういう特別のものが存在するように教える人があるかもしれないが、それは教える人の誤りであると思ふ。短歌には、なにも特別の約束や作法はない。正しい、わかりよい日本語で、三十一文字にさえ作ればよい。しかもその三十一文字さえ、例外、すなわち字余り・字足らずを許される、きわめて自由のものである。

こゝに例としてあげた作品は、名まえはしるさなかつたが、歌を作りはじめてせい／＼一、二箇月の人もあるようであるし、また数年のけいこを積んだ人もある。これを一樣に初心者と呼ぶのは当を得ないかもしれないが、決していわゆる専門家と称すべき人々ではない。しかし、こゝに採録した作品には、欠点や未熟なところはありながらも、みなそれ／＼に眞情を吐露している。一年や二年や五年や十年のけいこを超絶した、眞率の心が含まれている。それが短歌の生命である。私は一々の作品について、その点を明らかにしたいと思ふ。それさえわかれば、歌を味わって歌の本質をつかむこともできるし、おのずから偽りのない表現によって、眞実の歌を作り出すこともきわめて容易である。



私のこれから申し上げますのは、ごく初心のかたで、これから歌を作ってみようと志されるかた、——この志すということは一番たいせつなことで、ほかのことは私は存じませんが、歌のけいこは、まずはじめにそれほど熱心な志がないと、成就いたしません。——そういう熱心な志を持たれるかたに對する、実際の作品についてのごく初歩の注意を主として作る立場から申してみましよう。

(一) わが庭の大石のかげに一むらのすゝらん白く咲きいでにけり

(二) こぞの日に落合でとりしすゝらんのことし芽ばえてうれしかりける

この二首は一つ作者の歌であります。この作者はきわめて初心のかたで、読みましてわかるように、この程度の歌なら、どなたにもすぐよめるはずであります。しかし、(二)の歌に、「大石のかげに」といつてあるところはおもしろいのであります。どがおもしろいかというと、実際をありのままに言っていることであります。「わが庭の大石のかげに」と、いう言い方は、いかにも幼い、じょうず氣のない、まるで子供の自由画のようであります。が、この句によって、私どもは、作者の向かっている庭の実際の様子を、ある点までは心の中で描き出すことができます。この、事実をありのままに言うということは、歌を作る出発点であつて、しかもその到着点ではないかと思われれます。もし、この「大石のかげに」という句のかわりに、「美しい香のよい」などという句を用いたとしたならば、私どもがこの歌から受ける印象というものは、ずっと弱く、あいまいなものになるのではないかと思ひます。歌を作り始める第一歩に、ありのままだけではつまらない、何かそこに飾りをつけ、つやをつけなければならぬという考え方を、根本から改めてほしいと私は考えます。この歌の下の句「一

むらのすゝらん白く咲きいでにけり」という句も、余分の飾りがなく、たいへんはっきりした言い方でよいと思ひます。

(二)の歌であります。が、「こぞの日に落合でとりし」は、ずいぶんへたな言い方であります。「こぞの日」というのは、大年のある日という意味でしょうが、不器用すぎることはと思ひます。あるいは、場合によつては意味さえわかりにくいほどであります。「落合でとりし」の落合は、実際の地名でありましようが、「で」は、文語ならば「にて」といふべきところで、口語よりも文語を主としているこの歌、また一般に文語によつて現在の短歌のことばとしては、耳ざわりにさえ聞えると思ひます。最後の「うれしかりける」も、あまりならかな言ひ方ではないでしょう。「うれしかりける」と言う方があたりまえのところであります。そういう欠点をあげますと、この歌には幾つかの欠点をあげることができます。短歌で使うことばは、いろ／＼の意見はありますが、今日のところ、いわゆる文語で統一する方が都合がよいというのが実際であります。しかし、歌を始める人は、そういうことはあまり神経質に考えない方がよいのではないかと思ひます。この歌の「落合でとりし」などは、もちろん標準としては困るのでありますが、まず初心の人は、このくらのことは氣にしない方がよいのではないかと思ひます。試みに、この歌を、「こぞの春落合村よりとりて來しすゝらん芽ばえぬうれしと思ふ」とでもすれば、ことばは原作より整つてまいりますが、歌の實質としては、べつだん進歩したとは申されません。原作は、欠点がありながらも、作者の心持だけはくみとることが出来ます。もちろん歌では、ことばをみがき整えることは必要でありますが、歌のけいこがたゞことばを整えることだけになつては、かえつて無意義になりましよう。そのことも注意していただくと思ひます。



- (三) わが庭のすゞらんあまた花つけぬ顔近づけて甘き香をかぐ
- (四) 甘き香におし分け見ればみどり葉の葉かけに清きすゞらんの咲く
- (三)(四)は、また別のかたの歌でありますが、同じすゞらんのことをよんでいるので、比較してみましよう。(三)の「甘き香をかぐ」は、初歩も初歩で困るのでありますが、これは初心の作者のよくやりたがる傾向なのであります。しかし、この歌でも、「顔近づけて」というところはおもしろいと思いません。こゝが具体的になつておりまして、そのために、はつきりと、読むわれ／＼の心に印象されます。この歌から「顔近づけて」の句を除き去ると、この一首は、ばくぜんとして、つかまえてころがなくなります。(四)の方の「おし分け見れば」というのも、同じく具体的の力を持った句であります。以上(一)(二)(三)(四)は、それ／＼欠点のあるものでありますが、まず初心の行き方としては、のび／＼としておつて、参考になる作と思ひます。

(五) 小庭べに芽をふきにける草花のことしはいたく少なくなりぬ

(六) 枯れ／＼し庭木の中にかへでのみ芽をふきて日にかゞやきてをり

(五)(六)は、前の歌に比べるといくぶん心持が複雑になり、ことばづかいなども整つてきております。(五)の「草花のことしはいたく少なくなりぬ」は、さゝいなことながら、年月の移り変わりに対する作者の感動が扱われております。べつだん主観的のことばで、時の移りを悲しむとか、よお齡の傾くのを嘆くとか述べておりませんけれども、去年よりも芽ばえの少なくなった草花を心にとめて見るといふだけで、自然ににじみ出す氣持が現われております。そこを、もしあまり主観的に理論を述べたり、道徳的に結論したりすると、かえつて歌は浅薄なものとなつてしまひましよう。(六)の、枯れ枯

れた庭木の中にかえてだけが芽をふいて日に輝いているといふのも、いくらかもある平凡な事実であります。この歌のように、すなおにそのありのまゝを歌つてゐるのを読みますと、ことばの奥から、作者の深い感慨が響いてゐるようには感ぜられません。この作者は、私は個人的には存しておらないかたであります。二、三度拜見した詠草によつて、相当の年齢のかたのように見受けるのでありますが、前にあげたふたりの年の若いのかたの作品と比べると、すぐにわかる精神的な複雑さや円熟さが自然に見えております。そこがこの二首ではたいへんおもしろいところと思ひます。ありのまゝを、飾らずに、率直に言つてゐるためだと私は考へます。

(七) こぞ植ゑて忘れられてありしチューリップの丸きつぼみをけふ見いでけり

(八) 白梅の咲きよごれたる古幹に午後の陽あはくうつろひゆけり

(七)(八)は(五)(六)に多少似通ひの材料によつておりますから、その点で比較の便宜がある歌と思ひますが、この方は(五)(六)よりも幼い未熟なところがあります。(七)にしますと、「忘れられてありし」「丸きつぼみ」といふようなところが、いくぶん言ひすぎているのではありますまいか。「こぞ植ゑしまゝに忘れしチューリップの花のつぼみをけふ見いでたり」とでもする方がよくわかる歌であります。とにかく、作者の心持は、むしろ(三)(四)の歌などに近いように思われます。未熟といえば未熟、幼稚といえば幼稚なのであります。いやみなく、すら／＼と言つてゐるところは参考になりましよう。(八)の歌は「白梅の咲きよごれたる」というのでありますが、歌といえは何かきれいな、みやびやかなものでなければならぬように思つておられる人の多い中に、「咲きよごれたる古幹」といふように、ありのまゝに歌われているのは、短歌の新しい行き方にも一致するものであります。こ



の作者はきわめて初心のようでありますから、歌の古い、新しいなどということは考えてはおられないのであらうと思いますが、事実をありのままに作られたのが、自然と新しい進んだ行き方に一致したのでありましよう。

(九) 枯れくしくぬぎ林を抜け行きてすき浸したる水べにいでぬ

(十) 山原にすでに春めきし日の光すき浸したる水の青みて

いずれもおとなしい自然の見方をしてありますが、すきを浸した水を見ているのは、注意すべきでありましよう。だれでもしばしば遭遇する光景であります。単に「水ぬるむ」などと言わないで、すきを浸してあるという具象的のものを、きちんととらえているところがよいと思えます。(十)の方も、「山原にすでに春めきし日の光」というだけでは、たゞ一通りの感じにすぎないのでありますが、そこにすきの浸されて青んでいる水をとらえているので、一首全体の印象がめいりようになり、強くなつてきております。水の青むというのは、もちろん深い水が青く澄んでいるのではなく、浅い泉のしりなどが、水わたのようなもので色づいているのでありましよう。その言い方には、手腕が足りないところがあります。もう一步進めて、めいりような表現ができれば、印象は更に具体的になつたのでありましよう。

(短歌入門)

研究

一 この文は、かつてラジオで放送されたもの  
一部を抄出したものである。次の項目につい

て、筆者の見解を整理してみよう。

1 短歌の生命

2 短歌制作とことばの関係

3 短歌の新しい行き方

二 (二)の歌で「大石のかげに」、(三)の歌で「顔近づけて」、(四)の歌で「おし分け見れば」、(八)の歌で「咲きよごれたる古幹」、(九)・(十)の歌で「すき浸したる」と言った点を称揚しているが、それは、どういう意味で「よい」と言うのであるか。また、このようなことばは、どんな態度から生まれてくることばか。

三 (二)の歌を「こぞの春落合村よりとりて來し……」と改作しても、「歌の実質としては、べつだん進歩したとは申されません。」と言っ

ている意味を考えてみよう。

四 「水ぬるむ」とはどういう意味か。

五 自分たちの作つた短歌を一つ／＼吟味してみよう。ほんとうの氣持を表わそうとしているか、うまく見せよう、人を驚かそうという氣持が働いていないか。俳句や文章についても反省してみよう。

六 人との話しあいなどの場合、事実を、大げさに述べたり、興をそえようとしてわざとおもしろくつくろつて説明したりするようなことはないか。

〔二〕 雨にもまけず

谷川徹三

演題は「今日の心構え」となつておりますけれども、実はひとりの人について、そのひとりの人について、特にその一つの詩について、私はお話ししたいのであります。そのひとりの人というのは宮沢賢治、そしてその一つの詩というのは、「雨にもまけず」という、あの詩であります。宮沢賢治については、すでにみなさんも御存じと思えます。またその「雨にもまけず」の詩も、御存じのことが多いと思えます。宮沢賢治の作品は、あるものは、映画になつたり芝居になつたりしています。



今日では、その完全な全集も出ておりますし、この人について書かれた書物も、すでに四、五冊は出ております。そういう人について、しかも、その最もよく知られた詩について、こゝで改めて私がお話ししたいというのは、この人がもつともつと知られてよい人であり、そして、その詩がもつともつと知られてよい詩であると思うからであります。念のために、私はまずその詩を一度、こゝで朗読いたします。

雨にもまけず

風にもまけず

雪にも夏の暑さにもまけぬ

じょうぶなからだをもち

欲はなく

決して怒らず

いつもしずかにわらっている

一日に玄米四合と

みそと少しの野菜をたべ

あちゆることを

じぶんをかんじょうに入れずに

よくみき、しわかり

そしてわすれず

野原の松の林の陰の

小さなかやぶきの小屋にいて

東に病氣のこどもあれば

行つて看病してやり

西につかれた母あれば

行つてその稻の束を負い

南に死にそうなる人あれば

行つてこわがらなくてもいいといひ

北にけんかやしょうがあれば

つまらないからやめるといひ

ひでりのときはなみだをながし

さむさのなつはあろ／＼あるき

みんなにでくのぼうとよばれ

ほめられもせず

くにもされず

そういうものに

わたしは

なりたい



この詩を、私は、明治以後の日本人の作ったあらゆる詩の中で最高の詩であると思っています。もっと美しい詩、あるいはもっと深い詩というものはあるかもしれない。しかし、その精神の高さにあつて、これに比べうる詩を私は知らないであります。この詩が今日の時代に持つ、ほとんど測り知ることのできぬ大きな意味——これは結局宮沢賢治という詩人が今日の時代に持っている意味であります。それを私はこゝでお話したいのであります。

私がきょうこういう話をいたしますのは、今申しました理由のほかに、もう一つ理由がある。と申しますのは、昭和八年のきょう、九月二十日という日、宮沢賢治はその最後の病の床にあり、明けて二十一日の午後一時半、ついにこの世を去った、そういう因縁があるからであります。宮沢賢治はその時三十八歳でありました。その前々年、すなわち昭和六年九月に、宮

賢治の日記



沢賢治は、その時自分の従事していたある仕事の用をかねて東京に出てまいりました。その以前から少しく胸を悪くしていたのでありますけれど、家人のあやぶむのを押して出て来た。ところが、すぐその翌日から発熱して、駿河台の八幡館という下宿の一室に、ついに病臥する身となつたのであります。それから一週間ばかりして、病のからだをそのまゝ、故郷の花巻に帰つたのであります。それから死ぬまで、ずっとほとんど病床で暮らしました。この「雨にもまけず」の詩は、その昭和六年発熱病臥してまもなく、十一月三日に、病床で手帳に書かれたものであります。おそらくあお向けに寝たまゝで書かれたものでありましよう。その手帳は死後発見

されたものですが、鉛筆で書かれたその一部は、今日二、三の書物に写真版で載っていますから、みなさんの中には、それをごらんになつたかたもあるかと思ひます。

私は簡単に詩と呼びましたが、それは詩の形をしているからそう申したので、賢治自身のこれを書いた氣持は、詩を書くというふうな氣持ではなく、もつとじかに、自分の心の奥の／＼、最も深い願ひを、自分自身に言い聞かせるというふうな氣持ではなかつたかと思ひます。とにかく、こゝには、人に見せるといふ氣持は少しもない。これは全く自分のためだけに書いたものです。その意味では、願ひであるとともに祈りであります。その祈りの心の純粹さが、われ／＼を打つのであります。この詩でない詩、そして同時に詩の中の詩であるこの詩は、かようにしてできたのであります。

こうして、寝ついたまゝ、時に氣分のすぐれた時などには、起きて歩いたり、ものを書いたりいたしましたけれども、結局、この時の病氣にうちかつたことができないで昭和八年九月二十一日に賢治は死んだのであります。

その最後の時の様子を、ついでにもう少し詳しくお話いたしておきましょう。

これは、佐藤隆房という宮沢賢治の主治医であつた人が、その家人から聞いたところをしるしているものによつていふのであります。二十日にいよ／＼容態が悪くなつた。自分でも自覚し、家人もそれを氣づいた。それで、おとうさんにまくらもとに來てもらつて、いろ／＼と話しあつたのであります。その時に、病室の置き戸だなどまくらもとにある、うず高い原稿をさして、これは自分の今までの迷いの跡であるから、どうにでも適当に処分していただきたい、ということをやつた。こういうところにも、賢治の普通の詩人と違つた心構えが見られるのであります。もつとも、この点、心理は



單純ではないようでありまして、同じ日の晩、弟の清六氏を呼んだ時には、その原稿の中の特に詩と童話とを、これはおまえにやるから、おれが死んだあと、どこかの本屋で出したいという所があったら出したらい、しかしこちらから持って行くには及ばない、向こうから何か言ってくるまでそのまま預かっていてくれ、という意味のことを言っているのです。そのことばと父親に言ったことばとの間には、何か矛盾があるようにも考えられます。しかし、私は賢治の心の最も深所における氣持は、おそらく今まで書いたものを迷いの跡と言ったところにあつたろうと思つたのであります。そして、その心こそ、「雨にもまけず」を書いた心であると思つたのであります。

話は前後しますが、おとうさんにそういうふうと言つたその夕方、近くの村の人がひとり賢治をたずねて來ました。肥料のことでお聞きしたいことがあるというのであります。重態の病人でありますから、家人はちゅうちょしましたが、ともかくその旨を賢治に傳えますと、そういう人ならば、どうしても自分は会わなければならぬと、すぐ床から起きて、着物を着替えて玄關に出て、そうとは知らぬ村の人のゆっくりとした話を、少しもいやな顔もしないで聞いて、そうして肥料の設計についての詳しい指示を與えて歸した。賢治は大正十五年三十歳の時、それまで勤めていた花巻農学校教諭の職を辞し、町はずれの下根子櫻という地に自炊をしながら、附近を開墾して半農耕生活を始めたのであります。町はずれの下根子櫻という地に自炊をしながら、附近を開墾して半農耕生活を始めたのであります。手弁当で農村をまわつては、稲作の实地指導をしていたものであります。昭和二年六月までに、肥料設計書の枚数は二千枚に達していたそうで、その後も、時に断続はありましたが、死ぬまで引き続きやっていたのであります。そしてその仕事を、ついに死の床にまで持ちこんだのであります。

私は賢治を知つてすでに十年になりますが、賢治の生前にはついにあい知ることができず、これを非常に残念に思つていたのであります。しかし、死後まもなくその作品に接し、それ以來、この人に対する感情は年とともにいよ／＼高まるのを覚えます。私は、この人が、今日人々の思つているよりはるかに偉大な人であることを信じていますが、その、私の思つているより、實際はもっと偉大な人ではないかと思つてあります。透谷とか、一葉とか、啄木とか、死後その名のます／＼喧傳されている存在があります。しかし、それらの何人にもまして、賢治の名は、歲月のたつともにもますます大きくなる名ではないか、そう私は思つてあります。

(雨ニモマケズ)

### 研究

- 一 映画や芝居になつた宮沢賢治の作品にはどんなものがあるか。みんな話してみよう。
- 二 「精神の高さ」とはどういうことか。それは、この詩にどういふふうに現われているか。
- 三 「おろ／＼あるき」とはどういうことか。「あるき」は「あるいて」の意か「あるくこと」の意か考えてみよう。
- 四 「心の奥の／＼、最も深い願い」とか「祈り」とかはどういふことか。
- 五 「詩でない詩」とか「詩の中の詩」とかは、どういふ意味か。普通、詩といわれているものと比較して、この詩はどういふ点が違つているか。
- 六 「迷いの跡」とはどういうことか、考えてみよう。
- 七 宮沢賢治が父に言つたことばと弟に言つたことばとの矛盾を、筆者はどのように説明しているか、よく考えてみよう。
- 八 宮沢賢治が「雨にもまけず」を書いた心について考えてみよう。
- 九 この講演記録を読んで感じたことを、文章に



書いてみよう。

十 「雨にもまけず」の詩を朗読しよう。この詩

にはどんな朗読のしかたがふさわしいか。

#### 四 お 話

すべての教科の学習で、めい／＼で研究したことや、グループで共同して調査したことをまとめて、みんなの前で発表することがある。また、ホームルームの時間に、自分の意見を述べたり、学藝会やクラス会、または同窓会などで、自分の経験談や思い出話をしたりする。クラブで集まった場合などに、互に楽しいふんいきを作るために、自作の物語や、本で読んだお話をする。このように私たちの学校生活を考えてみると、多くの人の前に立って、まとまった話をする機会是非常に多い。社会が民主化されればされるほど、自分の意見を人の前で話さなければならない場合が多くなり、人が、話をしようにするようになれば、それだけ、その人の、いろ／＼の計画は支障なく進められ、社会全体の動きがなめらかになる。私たちは、できるだけ機会をとらえて、人の前で話をし、話し方の技術を高めるように心がけなければならない。

同じく人の前で話すといっても、自分の意見を述べることによって、聞き手の考えに影響を與え、やがて自分と同じ意見を持たせようと試みる演説、自分の調査や研究を報告し、正しくそれを傳達することを目的とする講演、聞き手に楽しみを與えようとするお話など、

その内容や、その時の目的によって、話の進め方や話をする態度などにも、それ／＼特別なくふうが必要である。

話というものは、相手の数が少なければ、比較的らくにできるのであるが、多くの人の前で、まとまった話をするには、非常にむずかしく、よほど練習をしておかなければなかなかうまくできないものである。よく書かれている話を、本で読んだら、それを自分のことばで話してみる。また、自分の話そうとすることを、くふうして、原稿を作ってみることも、話をじょうずに進める一つの道である。次に二、三の注意すべきことをあげよう。どんな場合にも、自分の言うことを聞き手に理解させることが一番たいせつである。それには、そこに集まっている人たちの年齢や、教養の程度を考えてわかりやすく話すようにしなければならぬ。演説などの場合には、聞き手の心を動かすために、しっかりと根拠を示し、いやしくも、自分の信念を疑われるようなことにならないようにし、熱誠を傾けて話を進めなければならぬ。説明のための話では、特に順序が非常に重要である。こみいった話をする場合、じょうずな話し手は、自分の趣旨なり目的なりの要点を最初に述べ、それを一々細かい具体的な例や数字をあげて説明し、最後にもう一度、その要点をまとめるといような話の進め方をする。それから、話はおもしろくなければならぬ。はつきりしていて正確な話も、おもしろさが欠けると聞き手は飽きてしまう。聞き手が進んで聞こうとしなければ、どんな話も意味をなさぬ。だから、話の内容に適当した変化・緩急が必要であり、時に軽いユーモアがほしい。特に、互に楽しく時を過ごそうというよ



うな場合のお話などでは、話の内容におもしろみがあり、その進め方に人の氣持をそゝるものがあるのが望ましい。また話し手の声の出し方やジェスチャーも、重んじなければならぬ。よくとある声で、あまり急がず、始終朗らかな明かるい態度で話すべきである。

こゝには、動物心理学の方で有名な話となつてゐるクレヴァアハンスの物語と、子供劇の脚本を載せて、それ／＼お話をする材料にした。その研究欄を十分利用してほしい。このほか、この教科書に出ている一つ／＼の文章をもとにして、そのあらすじや、それに対する感想などをまとめ、かわるがわる友だちの前で話す練習をしよう。

## 「一」クレヴァアハンスのまぢがい

小川 隆

今世紀のはじめころ、クレヴァアハンスというりこうな馬の話が廣く世間に傳えられて、たいへんな騒ぎでした。それでい／＼の國から學者たちが集まつて、クレヴァアハンスを実験することになりました。

クレヴァアハンスは、算術をすることが出来ます。足し算もできれば、引き算もできる。また、掛け算も割り算もできるのです。分数を小数になおすことも、逆に小数を分数になおすことも出来ます。その他、「七時半から五分たつと、時計の短針はどこをさしていますか。」というような細かな質問にも答えることが出来ました。

そればかりではありません。クレヴァアハンスは、音楽を聞いて楽しむこともできるのです。音楽を演奏している時、ちよつとでも調子のはずれた音を入れると、首を横に振つて、その音をとりわけ

るという様子をします。出された質問はどんなものでもわかつて、それに答えるのです。もちろん、馬のことですから、ことばを話すわけではありません。きまつた動作やあいずで答えるわけです。「は」の時は頭を縦に振るし、「いゝえ」は横に振ります。その他の答は、四肢を動かして、それ／＼表わします。

この馬の持ち主は、フォンリオステンという人で、ちよつと変わった人でしたが、クレヴァアハンスのことで、非常に名声を博しましたので、はじめは疑いを持っていた人たちも、しまいにはすっかり信用するようになりました。

クレヴァアハンスは、生まれた時からこんなりこうだったのでありません。こんなになるまでには、長い間、訓練されたのです。どうしてこんな訓練がはじめられたのかといいますが、それはフォンリオステンがこんな考えを信じていたからです。

馬と人間とは、同じ知恵を持つてゐるもので、それが外に出ないのは、たゞ教育されないから、訓練されないからだといふのです。それで、この考えを確かめたい一心で、こんな訓練を始めたわけです。かれは特にりこうな一頭の牡馬を買つて、この目的のために教育をはじめました。この馬があつてクレヴァアハンスになつたのです。

まず、小学校に入れたつもりで、小学校の課目にならつて教えてゆきます。先生は生徒に自分の考えを表わすやり方を教えておかねばなりません。それで、ABCの文字は数で言い表わすことにして、数は前肢のひづめで、それに相当するだけ、軽く床をたたくように訓練しました。最初には、オステンがハンスの足を一々つかんで、上下に動かしながら教え、床をたたく数が答に達するまで、声を出



して勘定しました。そうしているうちに、ハンスはオステンが文字を見せただけで、全然足をつかまなくても、その文字に相当する数を正しく打つようになりました。Aは一つ、Bは二つ、Cは三つというふうになくかすると、XやYやZになると、たくさんの数を打たなければならなくなります。それで床をたくく時間を節約するためには、一方のひずめで十の位を表わし、他方のひずめで一の位を表わすようにも訓練しました。

こういう教育をしているうちに、ことばをつぶったり、文章を作ったりすることもできるようになりました。こんなふうになつて、世の中の人が驚くようになるまでには、二年間かゝったということです。オステンは、ずいぶんしんぼう強い先生ですね。

さあ、こうなるとクレヴァアハンスの話は、どこでも、もちきりです。新聞にも書きたてられるようになります。しかし、見せ物の手品などでも、さるや犬や馬などが、似たようなことを演じたりします。手品には必ずたねがあります。世間の人たちは、はじめはそれを思い出して、クレヴァアハンスも見せ物と同じような手品だと思つていましたが、クレヴァアハンスの持ち主のフォンオステンは、いつころにお金をもうけようとはしません。だれにでも、どんな見知らぬ人にでも、オステンがいないうちにすら、クレヴァアハンスに質問をすることを許しましたし、しかも、そういう質問も、たいへいはオステンがいる時と同じように、まちがいを答えられるのです。こうなつては見せ物の手品として片づけるわけにはいきません。

とうとう、有名な動物学者・馬学者・心理学者たちが集まつて、クレヴァアハンスの審査委員会ができることになりました。この委員会は、慎重にクレヴァアハンスの不思議を解こうとしました。その結果、クレヴァアハンスに限つて手品でないという報告書を発表しました。フォンオステンは大喜びです。馬も人間と同じように知恵があると信じていた人たちは、みんな自分たちの勝利を喜びあいました。しかし、クレヴァアハンスのお話でこれであまいならば、私はあえてみなさんにこのお話を、するつもりはなかつたのです。それよりも、これから先のお話をよく読んで味わってください。クレヴァアハンスの知恵を確かめたと信じていたのは、ほんとうははかない夢だったので。数週間たつて、委員会が、ブングストという人の実験を発表したからです。ブングストの実験は、こんなぐあいに進められました。

今までの実験では、問題をクレヴァアハンスに示す時に、その場にいる人たちは、もちろん、その問題をいっしょに見て知っているわけですが、今度は、問題をその場にいる人たちには知れないようにして、クレヴァアハンスだけがわかるようにします。たとえば、一枚一枚のカードに問題を書いてごちゃごちゃにし、その中から一枚を抜き出して、それがどの問題を書いたカードかがその場合にいるだれにもわからないようにして、ハンスに示します。そうすると、もう馬は全く答えることができません。一番やさしい問題にも答えられないのです。クレヴァアハンスは、とめどなくひずめで床をたくいたり、わけのわからないしかたで床を打ったりするだけです。その様子は、ちょうど問題を解こうとしているというよりは、問題を出した人が床をたくくのをやめるといふあいつをするのを、今か今かと待っているように見えます。これはどうしたことでしょうか。

クレヴァアハンスが習つたのは、問題のほんとうの解き方ではなかつたのです。答に相当する打ち数を打ち終つた瞬間に、まわりの人が知らず知らずちよつと動いたりする、この微妙な動きを習つ



ていたのです。

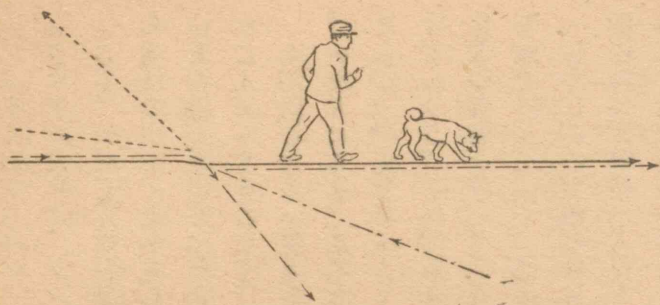
実験を行う質問者の立場になって考えてみましょう。質問者は、必要な打ち数をあらかじめ知っているわけです。床をたたく打ち数を正確に数えるためには質問者自身が数えなければなりません。それです。最後の打ち数に達した瞬間には、質問者は自然にほっとすることになります。そういう時には、頭や胸を、思わずちょっと、前へ出すとか、うしろへ引くとかするものです。クレヴァーハンスはまわりの人々がするこの微妙な運動に答えていたのです。

ブングストは、こういう運動を問題の答と関係なく、少々大げさにやってみましたところ、クレヴァーハンスの答を自由に変えることに成功しました。この馬は、もと／＼こういう運動をわざ／＼習ったわけではないのですが、訓練中に自然にそうならされてしまったものでしょう。

あまがえるは、じっとしている獲物には気がつきませんが、それが動きだすと、急にとびつきます。動物は静止しているものには鈍感ですが、運動には、それがほんのわずかな運動でも、気づくことができます。馬についても同じことです。

馬が人間と同じ知恵を持っているという信念を確かめるためにやった大騒ぎは、たゞ、馬が微妙な運動をすばやく見分けられることを確かめていたにすぎなかったわけです。世間の人たちや学者たちまでが、それに気がつかなかったのは、クレヴァーハンスの答の正確なことにまどわされて、答が得られるしかたが全く人間の場合と同じだと思ひこんでいたからです。

動物が人間と同じような表情をしたり、行動をする時に、人間の場合をすぐ考えて、あゝも思ひ、こうも思ひしますが、その行動をとらわれない心で観察し、前後のすじみちを考えてみますと、全く



当たらないことがあります。クレヴァーハンスの大騒ぎは、この上もなくばかげたことのようにですが、動物が人間と同じ知恵を持っていて、人間と同じように教育ができるというのはまぢがいだということ、はつきり私たちに教えてくれたのです。それで私たちはこのことを、「クレヴァーハンスのまぢがい」と呼んでいます。その意味は、クレヴァーハンスが答えをまぢがい

たからではありません。クレヴァーハンスが人間が持っているような知恵が答えられると信じていた人たちのまぢがいという意味です。

「クレヴァーハンスのまぢがい」のもう一つの例をお話しましょう。

プロシアの警察では、犯罪の証拠を確かめるために、犬を使ったことがあります。それは犬がどんなにおいでもかぎ分けて、同じにおいをたどって行けると信じられていたからです。それで、そういう犬の性質を利用して犯人をつかまえていたわけです。ある時、犬が追っかけたことがほんとうに犯罪の証拠になるかどうか、多少怪しくなってきた、法廷で争われることになりました。この争いを裁判するために、プロシアの大臣は六匹の犬を使って、いろ／＼実験をしてみました。

上の図をごらん下さい。かきねに囲まれた場所の中に、いろ／＼なにおいをまいてコースができています。このコースは、時々ずつと近よっていたり、交又していたりします。また新しいにおいの中に時には一晝夜ぐらいたったにおいもまぜてあります。そして、このコースは犬を連れて行く



人には全くわからないようにしておきます。これは、「クレヴァアハンスのまちがい」に落ちこまないようにするためで、ブングストがやった実験と同じことです。

さあ、犬はどんな行動をしたでしょうか。りこうなみなさんはもうおわかりかもしれませんが。十七回の実験の中で、犬が正しく正しいのコースをたどれたことは、一回もありませんでした。犬は、正しいを全然かぎ出せないか、かぎ出しても、しばらくすると、それと交叉した他の正しいのコースへ迷いこんだりするのです。

犬が同じ正しいのコースをまちがいがなくなると行って行き、犯人をつかまえることができると思ひこんでいた人たちは、この実験の結果を知って、たいへんがっかりしたのは申すまでもありません。それならば、今までたび／＼、犬が歩いて行く先をたどって行って犯人が見つけれられたのは、どうしたわけでしょう。それはちょうど、クレヴァアハンスの答と同じです。犬を連れた人間が、知らず知らず犬の行動を導いていたのです。犬が人間を連れて行ったのではなくて、人間がいろ／＼の予想や、予感を持っていて、逆に犬を連れて行ったわけなのです。

しかしこの実験の結果から、犬が正しいをかぎ分けられないというのはまたまちがいです。この実験の結果は警察の人たちをたいへん失望させましたが、それ以来、警察犬の訓練には特別の注意が拂われ、犬が追っかけたことが、今度はもっと信用できるようになったということなのです。

犬は生まれながら、どんなにおいでもかぎ分けて、たどって行けるものではありません。ことに犬に慣れないにおいでは、たとえ人間にはすぐにわかるにおいでも、たどって行くことはできないのです。たゞ犬は、訓練することができなのです。もっと正しくいえば、「クレヴァアハンスのまちがい」に落

ちこまないように、訓練することがたいせつなのです。「クレヴァアハンスのまちがい」は、こんなわけで、動物の心を見る見方を、私たちにはっきり教えてくれたのです。  
(雑誌「少年少女」)

研究

- 一 フォンオステンは、どんな考えにもとづいて馬の訓練を始めたのか。
- 二 はじめはクレヴァアハンスのことを手品の一種だろうと思っていた世間の人々が、ついにはそうでないと信ずるようになった理由について考えよう。
- 三 「ブングストは、こういう運動を問題の答と関係なく、少々大げさにやってみましたところ、クレヴァアハンスの答を自由に変えることに成功しました。」ということを、具体的に説明してみよう。
- 四 クレヴァアハンスの答の出し方と、人間の答の出し方の違いについて考えよう。
- 五 クレヴァアハンスの訓練は、動物研究の上で、何か役に立った点があるか。それを簡単に説明

- 六 犬などを訓練する場合、「クレヴァアハンスのまちがい」に落ちこまないようにすることがたいせつだということを説明しよう。
- 七 a「動物の心を見る見方を教えてくれる」ということは、b「動物の心の働きについて教えてくれる」とは、どう違うか。こゝでaの言い方をして、bの言い方をしていない理由を考えよう。
- 八 この文は、われ／＼が、こみいった話などを説明する場合のよい参考になると思う。次の項目にしたがって、この文の作者の用意について考えてみよう。

- (1) どんな話題が用意されたか。
- (2) 二つの話題のうち、なぜクレヴァアハンスの



- (3) 書き出しに、クレヴァアハンスのりこうなことを、一々具体的にあげているのは、読者に、どんな感じを興えるか。
- (4) 話の途中で、「しかし、クレヴァアハンスのお話が、これでおしまいならば、……これから先のお話を、よく読んで味わってください。」と、入れた、話の進め方について考えてみよう。
- (5) クレヴァアハンスの話の後半で、「クレヴァアハンスの知恵を確かめたと信じていたのは、ほんとうははかない夢だったので。」と結論を述べてから、その説明にはいったやり方について考えてみよう。

〔二〕 一に十二をかけるのと

十二に一をかけるのと

登場人物

去年 (古5年)

久保田万太郎

- (6) プングストの実験を説明したあとで、「これはどうしたことでしょうか。」と、疑問の形にし、次にそのわけを説明した説き方について考えてみよう。
- (7) 「実験を行う質問者の立場になって考えてみましょう。」と、読者(聞き手)に呼びかけて、読者の心を働かせながら、説明を続けて行く巧みさを参考にしよう。
- (8) 「それで私たちは、このことを『クレヴァアハンスのまちがい』と呼んでいます。その意味は……という意味です。」という説明のしかたを味わおう。
- (9) 二つの話題をまとめて結んでいる点を参考にしよう。

今年 (新しい年)	一月	七月
	二月	八月
	三月	九月
	四月	十月
	五月	十一月
	六月	十二月

このお芝居は、昔のことでも今のことでもありません。このお芝居を見る人が昔と思えば昔、今と思えば今です。

第一場 「年」のへや

第二場 隆一君のへや (略)

第三場 またもとの「年」のへや

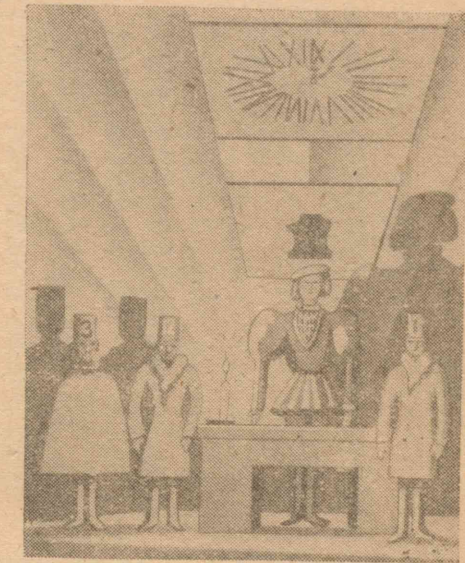
第一場 「年」のへや

幕があがると、「年」のへや、正面に大きな事務机といすがある、机の上にはいろいろな書類が散乱して、そのすみに卓上電話機が載っている。下手に戸口があり、正面奥の壁に窓があり、時計と大きながし暦が掛かっている。上手に暖炉がある。

ひとりの老人(古い年、去年)が、書類を整理して、不用のものを暖炉で燃している。時計は十二時五分前



をさしている。はがし曆に十二月三十一日  
という文字という文字がはつきり読める。  
しばらくすると電話のベルが鳴る。



古い年 (電話に出る) もし／＼……もし／＼、  
……いゝえ、違います、私は古い年です  
……え、え、「新しい年」はまだ来ません。  
(時計を見て) そうですね……あと五分ば  
かりで交代の時間ですから、まもなくも  
う来るでしょう……え、え、ありがとうございます、  
全く疲れました。でも、どうやらこの一

年間たいした事件もなくすんだんで、ほっとしているところですよ……え、ありがとうございます、もうお  
目にかゝることもあるまいと思えます。ではごきげんよう。さようなら……(電話を切る。) やれ  
やれ、もう五分ばかりだ、さ。急がなくちゃ。

「古い年」また片づけものを続ける。

――間――

やがて遠くから馬ぞりの鈴の音が聞えてくる。「古い年」それに気づいて耳を傾ける。そりの鈴の音、だん  
だん近くなる。そして戸口の前で止まるけはいがして、だれか戸口をたたく。

古い年 はい／＼、どなたです。どうぞおはいりください。

戸をあけて、新しい年「ことし」が、はいつて来る。若々しい元氣な青年で、明朗、快活な動作、スーッと  
イスを持っている。

新しい年 ごめんください。ぼく、「新しい年」です。どうもおそくなりまして……

古い年 やあ、「新しい年」さんですか。さつきからも見える時分だと思ってお待ちしてしまし  
た。寒かったです。さ、さ、ずっと暖炉のそばにお寄りください。

新しい年 え、ありがとうございます。(火にあたりながら) あ、寒かった。どうもおそくなりました。お待遠  
さまでした。

古い年 いや／＼、まだ交代の時間には五分ばかりあるでしょう。さ、火のそばで休んでいてくだ  
さる。

新しい年 え、ありがとうございます。(そこいらじゅうを珍らしそうに歩きまわる。時計の所へ来て) あ、もう  
すぐですね。ぼくの仕事が始まるのは。(古い年がまだいそがしそうにしているのを見て) 「古い年」さ  
ん、もうお休みになったらいいでしょう。あとはぼくがやりますよ。ぼくはこんなに元氣ですか  
ら、どんなことでもどん／＼やるつもりです。

古い年 (なおも仕事を続けながら) いや／＼、あなたにお渡ししなくてはならない書類の始末がまだ  
できていないので……。ことしはいそがしい年でした。もっとしたいことがたくさんあったので  
すが、思っていた半分もできませんでした。そしてこうしているんなことをし残したまゝ去って  
行かなくてはならないのが心残りです。

新しい年 そのあなたがし残したことってというのは、どんなことですか。聞かせてください。ぼく



にできることだったら、ぼくが代わってやってみます。……こゝへ来る途中、その上で、ぼくはいろんなことを考えて来ました。ぼくは、ぼくがめんどうを見る一年間を、今までになかったくらい幸福な一年にしていくつもりなんです。

古い年 あなたはまだお若い。そして元気があって、いろ／＼としたいことを頭の中にいっぱい持っていてのようだ。しっかりやってください。……私も一年前にこゝへ来た時は、ちょうどあなたのように若くて元気があった。そしてあなたと同じように、やっぱりやってみたいことを山ほど考えていました。でもやっぱり、思っていた半分もできなかったのです。そしてこう年をとってしまいました。あなたは、しっかりとやってください。

新しい年 え、やりやすとも。

古い年 (机の上の大きな帳面を取り) こゝに私がしてみたいと思つてとう／＼できずにしまったことが全部書いてあります。おひまの時にも、読んでみてください。何かのお役に立つかもしれないから。

新しい年 え、読みます。そしてぼくにできることならどん／＼やってみます。

古い年 ありがとうございます。

新しい年 けれどもぼくはできるだけぼくの思うような年にするつもりです。いっしょうけんめいによつて、世の中の人間たちを幸福にしてやるつもりです。ぼくは子供が大好きです。だから子供たちが喜ぶように、子供たちがこんなにおもしろい年は今までになかったと、言うような年にしてやります。

いろ／＼な思いつきが次から次からと出てくる様子で、手を振り上げたり、おろしたりしながら、歩きまわる。

新しい年 (立ちどまって) ねえ、「古い年」さん、いっしょうけんめいやりさえすればできますねえ。

え。ぼくは子供たちの喜ぶ顔を見るのが一番好きです。

古い年 え、しっかりやりなさい。私もあなたとちょうど同じような考えを持ってました、一年前にこゝへ来たてのころはね。でも、いざとなると、思いもかけないところからじゃまかはいって、思うようにはなかく／＼いきませんでした。たとえば、第一あのお天気という気まぐれ者がいます。それと人間たちだつてずいぶん勝手なことばかり言います。

新しい年 お天気とかいう者は、そんなに気まぐれ者なんでしょうか。

古い年 いまにおわかりになります。次があの一「月」たちです。全部で十二人いますが、これをまた次々と順序よく並べてゆくのが、なみたいていのことではありません。なにしろ十二人が十二人ともそれ／＼違った性質なんですからね。中でも六月なんていうのは、めそ／＼泣いてばかりいる泣きむしで、いくじがないので、お天気までじめ／＼して、雨ばかり降りたがります。そうそう、三月つてやつもしま／＼にいけない子です。気が多くてちょっとのまもじつとしていないやつですから。お天気だつてそれをいいことにして寒かったり、暖かったり、人間たちが悪いかぜをひくのは、たいていこの月です。でもまあ私は、どうにかこうにか十二人の連中をけんかしないように並べてやつたつもりです。もうじきに、今働いている十二月が、こゝへ帰つて来るでしょう。新しい年 え、その十二人の「月」たちのことは、来る前にも話に聞いていました。でもぼくは、



その連中とよく話しあつてうまくやつて行きませう。

古い年　それから、いつも世の中をまわつて歩いて氣をつけてやってく下さいよ。少しでも油断をしていると、田畑の作物が枯れたりします。そうかといって、雨ばかり降ると洪水みづが起りますしね。とにかく私は、この一年間働きずめに働いたので、すっかり疲れてしまいましたよ。

新しい年　そうでしょう。たいへんでしたでしょうね。

古い年　そう／＼、あなたは子供たちのことをあつちやつてましたね。この子供たちというものがまたやっかいなもので、日のぼか／＼あたるいいお天氣の日を作つて、ピクニックや草摘みをさせてやつても、すぐに飽きてしまつて、秋のどんぼつりの方がいいなんて言いだすし、夏にすれば、海水浴をして喜んで遊んでいるかと思つと、すぐそれに飽きて、雪合戦がしたいなんて言いだします。怠け者の子供などは、一年じゅう夏休みだったらいいのにと、こゝへ電話をかけてくるしまつです。……でも、私は、私にできることだけはいっしょうけんめいしてやつたつもりです。

(時計が十二時を打つ。)

古い年　(がっかりしたように) いけない、とう／＼時間になつてしまいました。さあもう、あなたの年になつてしまいました。私は行かなくてはなりません。

(遠く下界の方から「ぼたるの光」が聞えてくる。「古い年」、それをぼんやりと聞いている。)

古い年　……私の年はおしまいになつてしまつた。……思つたことの半分もできなかったのに……。(窓から見おろす。)

新しい年

いや／＼、あなたはりっぱにお仕事をなさつたに違いありません。ぼら、お聞きなさい。それが何よりの証拠には、人間たちがあゝやつて、あなたがなさつたこの一年間のお仕事にお別れする歌を歌っていますよ。

古い年

(はるか下界の方に窓から手を振りながら) さようなら、子供たち、しあわせにおなり……。もう行かなくてはなりません。「新しい年」さん、どうも時間がなくて、このへやも散らかりっぱなしで……。書類はあなたのいるものだけは机の引き出しに入れてあります。みな一日でわかるようにしてあるつもりです。

新しい年

どうも、お世話さまです。……さ、いよ／＼ぼくの年が始まつた。夜があけたらすぐに仕事を始めなくちゃ。

(だれか戸口をたたく音。)

新しい年

おや、だれか来ましたよ。

古い年

あゝ、十二月君でしょう。おはいり。

(戸口をあけて、十二月、はいつて来る。——白い上着に白いズボン、全身白いものを着て、胸に大きく12と書いてある。)

十二月

ごめんください。(「古い年」に) たゞ今帰りました。

古い年

あゝ、十二月君、疲れたらう。ぼんとうに御苦労だった。何も変わったことはなかつたね。

十二月

はい、はつきりまで「あすは楽しいお正月だ。」と言つて、歌ばかり歌つてなかく寝ない

子供がだいぶいまして、親たちを困らせていました。私が眠りの砂をまいて歩いたので、今ご



ろ全部眠ったはずでございます。

古い年　そりゃ御苦労だったね。こゝにちられるのがことし一年きみたちのめんどうを見てくださる「新しい年」なんだ。「新しい年」さん、これが十二人の月たちの中の十二月君です。あなたのお仕事を一月だけお手傳いする人です。

新しい年　やあ、きみが十二月君ですか。ぼくは「新しい年」です。どうかよろしく願いますよ。(と、握手する。)

十二月　はあ、こちらこそ……。

古い年　さ、十二月君、疲れたらうから、あっちのへやへ行つて休みたまえ。

十二月　では、そうさせていたゞきます。「新しい年」には、また、いづれお手傳いさせていたゞきます。「古い年」に) どうもいろ／＼と御世話さまでございました。どうぞお元気で。

古い年　ありがとうございます、きみも元気でね。じゃ、ごきげんよう。(十二月、出て行く。)

古い年　さ、「新しい年」さん、私の仕事はこれですっかり終りました。では、あとはよろしくお願ひします。

新しい年　え、万事引き受けましたから御安心ください。お疲れさまでした。

古い年　(がいとうを着ながら) ほんとうにすっかりくたびれてしまいましたよ。(壁の曆に気がつき) ああ、あすこれにまだ私の曆がかゝっていた。

新しい年　あ、それは私があとで取りましますから……。

古い年　いや、これは私が記念に持つて行きますしよ。

「古い年」、曆をはずして腕にかゝえ、したくをし終つて戸口の方へ行く。

「新しい年」送つて行く。

古い年　(あたりをなごり惜しそうにながめ) では、さようなら。しっかりおやりなさい。いいですか、くれ／＼も「月」たちの並べ方にお氣をつけなさいよ。

新しい年　(少しうるさそうに) え、御忠告ありがとうございます。なんとかやってみるつもりです。だいじょうぶです。……お氣をつけになって。

古い年　子供たちをかわいがつてやつて下さいよ。じゃ、ごきげんよう。

新しい年　さようなら、ごきげんよう。

「古い年」、戸口から出て行く。やがてまた馬ぞりの鈴の音が聞えて、それがだん／＼遠くなつて行く。「新しい年」、しばらく窓から手を振つて見送る。やがて机の前にすわり、スニツケースから自分の曆を出してながめる。

新しい年　……「古い年」の最後に言ったことを思い出して、子供たちをかわいがつてやつて下さいよ……か。ぼくはあの老人よりもだれよりも、子供が好きなんだ。子供たちの思う通りのことをしてやつて、思うどんぶんに喜ばしてやろう。そうだ、ことしは万事子供本位にしてやろう……。さて、さしあたりぼくの仕事を手傳つてくれる「月」をきめなくちゃならないけれど……。どれにしたものかな。

曆をくりはじめ。



電話のベルが鳴る。

新しい年 (電話に出る。相手方の声がフィルターマイクを通じてスピーカーから聞える。かねいらしい男の子の声である。) はい。《あのもし、》「新しい年」のおじさんですか。《え、そうです。ぼくが「新しい年」です。《新年おめでとうございます。》いやおめでとう。《ぼく、日本の子供です。今からこととしてしよう。だからいい子になるお約束をします。》いい子になるお約束だって。《え、ことしからはぼく一つおにいさんになったんだから、なんでも自分のことは自分でします。それからおいたもいません。おもちゃをこわしたり、御本をやぶいたりしません。》うん、えらい、えらい。一つにいさんになったら、えらくなったね。《だから、おじさん、ぼくもいい子になりますから、ことしはあらしや大水なんか無い、いい年にしてくださいね。》え、いいとも、いいとも。きみたち子供がいい子になりさえすれば、おじさんもいっしょうけんめい、せいっぱいの仕事をしていい年にするつもりですよ。《もし、》それからもう一つお願いがあるんですけれど。《なんだね、お願いっていうのは。《あのね、ことしの日曜日は、みんないいお天気にしてくださいね、いつの日曜日でも、外で遊べるようにね。》はっはっはっは、日曜日には必ず外で遊べるようにとね。はっはっはっは、いいとも、いいとも。きつとそうしますよ。《では、お願いします。さようなら。》あ、さようなら……。》

電話を切る。

「新しい年」立ちあがって歩きまわる。

新しい年

……「いい子になるから日曜日はいつもお天気にしてくれ。」か……。子供ってかわい

いもんだな。あ、いうかわいい子供たちを、みんな喜ばしてやりたいもんだ。みんなひとりひとりの願いを聞いてやりたいもんだな。……だが待てよ。ひとりの子供が冬がいい、雪合戦や雪だるまを作る方がいいと言うのに、もうひとりの子供は夏の方がいい、海で泳いだり、山登りがしたいと言ったらどうしよう。……こっちの女の子が春の野原で花摘みをしたと言うのに、あっちの女の子が秋の山でくり拾いをしたと言いだしたらどうしよう……。《考えながら歩きまわる。》……そうだ、春と夏と秋と冬が別々にあるからいけないんだ。うん、それがいい。みんないっしょにするんだ。春と夏と秋と冬を一べんに働かせればいいんだ。一年十二箇月の「月」たちを、十二人みんな一べんに働かせればいい。……なに、ひとりずつ一月交代で働いたって、十二人が一べんに十二箇月働いたって、結局同じことじゃないか。十二に一をかけたって、一に十二をかけたって、答は同じじゃないか……。そうすれば、今までの年とまるで違った年になるわけだ。……そうだ、そうすれば、ほんとうの意味での新しい年になるわけだ。そうだ、そうしよう。

「新しい年」、浮きくとして机の前にすわり、曆を取り上げる。すると戸口でだれかノックする音が聞える。

新しい年

……おや、だれだろう。おはいりなさい。

戸をあけて「一月」がはいって来る。

一月

おめでとうございます。

新しい年

おめでとう。きみは。

一月

「一月」ひんがります。

新しい年

あ、きみが「一月」君か。さ、こっちははいつて火にあたりたまえ。



一月 は、ありがとうございます。私は今まであなたが呼びになるのを待っておりましたけれど、あまりおそいもので、こちらからお伺いしました。

新しい年 あ、そりや失敬したね。なに、ちょっと考えごとをしていたもんでね。……ね、きみ、ぼくはこの一年間にいろ／＼なことをして、人間たちを幸福にしてやりたいと思っっているんだよ。

一月 それは結構なことでございます。さぞ人間たちが喜びますでしょう。

新しい年 ぼくはね、中でも子供たちが大好きでね、あの子供たちが喜んで笑っている顔を見るのが、ぼくは一番好きなんだよ。だから、この一年間は子供たちのために、特に子供本位にしてやろうと思っっているんですよ。

一月 ほんとうに結構なお考えで。

新しい年 子供はかわいいですからね。今もひとり、男の子が電話をかけてきましたね。ことしはいい子になりますって、わざ／＼約束してきましたよ。こんなことは今までにありませんか。

一月 そうでございます……ないこともございませんでしたようで……。

新しい年 そうですか。でも、そんなことはどうでもいい。……ね、「一月」君、ぼくはこの一年を今までとまるで違った年に見してみようと思っっているんだよ。

一月 と申しますと。

新しい年 つまりきみたちに、一べんに働いてもらうんだ。

一月 (不思議そうな顔をして、「新しい年」の顔を見る。)

新しい年 今までは一年を十二箇月に分けて、きみたち十二人の「月」が交代で働いてくれたんで

しょう。

一月 はい。

新しい年 それをぼくは十二人一べんに、一年じゅう働いてもらおうと思うんだ。そうすれば、子供たちは春も夏も秋も冬も一べんに持っていることになる。そうして、冬の好きな者は冬、夏の好きな者は夏を選べばいい。……どうです、名案でしょう。

一月 はあ。……ですが、そんなことはいまだかつてございませんでしたが……。

新しい年 そうです。今までになかったことでしょう。今までになかったようにするからこそ、ことしがほんとうの意味で新しい年になるんじゃないやありませんか。

一月 なるほど。……いや、私はどうでもかまいません。たゞ今まで通り、他の「月」たちより先に人間たちの世の中をまわらせていたゞきさえすれば結構なので……。

新しい年 そんなことならわけのないことです……。さ、さっそくぼくの仕事を始めなくてはなりません。「一月」君、他の月の諸君をぼくは知りませんから、ちょっとこゝへ呼んでくださいませんか。

一月 はあ、ですが私の知っておりますのは、「十二月」と「二月」のふたりだけでございますが……。新しい年 いいですとも。とりあえずその人たちを呼んでください。……そう／＼、きみは「三月」君とかいう人を知りませんか。

一月 「二月」から聞いて名まえだけは知っております。

新しい年 ついでに呼んでください。



一月 承知しました。

「二月」電話へかゝる。

一月 ……もしく、「二月」君の家を願います……。あ、もしく、「二月」君ですか。(はい。私「二月」です。)私は「一月」ですが。(あ、一月「君か。どうしたんだい、また年が変わったばかりじゃないか。交代にはまだ一月もあるよ。うん、そうなんだが、今度の新しい年のどんな様が、お呼びなんだ。すぐ来てくれたまえ。(そうか、それじゃすぐ行きます。あ、それから「三月」君も誘って来てくれたまえ。(あ、承知した。)じゃ、またあとで、さようなら。)

「二月」電話を切る。

一月 「二月」は「三月」を連れて、すぐ来るそうでございます。

新しい年 あ、そうですか。

「二月」また電話をかける。

一月 ……もしく、今度は「十二月」君の所を願います……。あ、もしく、「十二月」君ですか。私「一月」です。(あ、一月「君か。何か用かい。私は今やっと仕事が終わって、すっかりくたびれてしまったから寝ようと思ってるころなんだ。)御苦労さまでしたね。お疲れのところすみませんが、新しい年のどんな様が御呼びですから、ちょっと来ていたゞきたいんですが。(新しい年のどんな様が。なんの用だろう。今すぐ行きます。))じゃ、後ほど。

「二月」電話を切る。

一月 「十二月」も来るそうです。

新しい年 あ、ありがとう。

「新しい年」浮きくと歩きまわる。

「一月」へやのすみに立っている。

やがて、戸口にノックの音がする。

新しい年 (待ちかねたように)おはいりなさい。

「十二月」「二月」「三月」の三人、はいつて来る。「十二月」は、中でも疲れきったような顔をして、ねむ

そうな目をしている。「三月」は少しもじっとしていない男である。

三月 どうもお待たせしました。私、「三月」です。

新しい年 あ、「三月」君ですか。よく来てくれましたね。「十二月」君、さきほどは失礼。せつかく休もうとしているところを起してごめんなさい。きみは「二月」君ですね。ぼくが新しい年です。(「二月」あいさつをする。)さ、諸君、どうぞこちらへいらっしゃい。……みなさんに来ていたいたのはほかでもありません。今も「一月」君には話したんですが、ことは特に子供たち本位の年にしようと思しますので、今までになかったような楽しい年にするつもりです。それで、今までと全然やり方を変えて、きみたちに一べんに働いてもらおうと思うのです。

三月 そりゃおもしろい。そりゃ、きつと子供が喜びますよ。

新しい年 ぼくもそう思います。春と夏と秋と冬が一べんにあつたら、子供たちは一年じゅうなんの遊びでもできるわけですからね。……えっと、これで四人……あと八人いるわけですね。だれかほかの人を知りませんか。



三月 私は全部知っています。ちょっと一っ走り行って、みんなを呼んで来ましようか。

新しい年 ほう、みんな知っているんですか。それはちよいどいい。お願いします。

三月 じゃ、ちょっと行って来ます。みんな喜んで来ますよ。

「三月」急いで出て行く。

新しい年 どうです、「二月」君と「十二月」君、御意見は……。

二月 私は別に意見はありません。たゞ私は、みんなよりからだか弱いものですから、今まではほかの「月」より働く日数が二日短くていいことになっていました。ですから、ほかの「月」より少し仕事の分量さえ少なくてよろしければ、結構なことだと思えます。

十二月 私はくたびれて、眠くて眠くてたまりません。少し眠ってからでよければ、かまいません。

新しい年 いいですとも。私はなにも無理に働けと言うのではありません。たゞ、子供たちがいつでもなんでも、好きなことをして遊べるようにしてくださいなさいいんですから。

一問一

戸の外でおよせいのけはいがする。「三月」を先頭に、「四月」「五月」「六月」「七月」「八月」「九月」「十月」

「十一月」が、どや／＼とはいって来る。

夏の「月」たちは、寒さで震えている。

そして季節別に三人ずつ並んで立つ。

三月 みんな連れて来ました。みなさん、このかたが今度の「新しい年」のどんな様です。

一同、あいさつする。

新しい年 やあ、みなさん、よく来てくださいました。ぼくが「新しい年」です。さて、きょうち

集まり願ったのは……。

三月 あ、そのことは今来る途中でみんなに話しておきました。

新しい年 そうですか。では重ねてく／＼しくは申しません。この「三月」君からお聞きのように

に、ぼくはことはすべて子供本位の年にしようと思っっています。で、どの子供でも思った通りのことをして遊べるように、つまり冬の好きな子には冬、夏の好きな子には夏というふうに、一べんにすべての子供たちの願いを聞いてやるために、諸君全部が一度に働いてもらいたいです。

一同、いまさらのようにがや／＼始める。

新しい年 静かにしてください。それからみなさんにお願したいことは、子供たちが幸福に遊べるためなら、なんでもできるだけのことをしてやってもらいたいことです。そのつもりでどうか。

三月 どうです、諸君、おもしろいじゃありませんか。私はこういうことが大好きです。

一同、更に大きな声でがや／＼言う。

一月 私は雪と氷を持って行く。そして子供たちにスキーやそりやスケートで遊ばせてやるつもりです。

五月 でも、あたし困りましたわ。ことしの着物をまだ作ってないんです。

三月 去年のでいいじゃないか。

六月 私はほたるを持って行ってやりましょう。



七月 私はとんぼやせみを持って行ってやります。子供たちは、とんぼつりが大好きですから。

八月 私は海岸の砂浜をじり／＼に熱くしてやりましょう。子供たちが海水浴ができるように。

新しい年 どうです、「九月」君は。  
九月 私は涼しい風を持って行ってやります。第一、子供たちは私かまわって行くと、みんな「学校が始まってうれしいな。」と言いますよ。

七月 私が行くと、いつも子供は、「夏休みになってうれしいな。」と言いますよ。

一同、またがや／＼となる。

新しい年 とにかくさつき、子供が電話をかけてきて、ことしは一つおにいさんになったから、去年よりもいっしょうけんめいやるんだって、約束してきましたよ。さ、もっと相談したいことがありますけれど、それはまたいずれのことにして、そろ／＼出かけてください。

一同、またごた／＼する。

三月 さ、諸君、行きましょう。

一月 私が一番先に行きますよ。

新しい年 じゃ、みなさん、子供たちを楽しく遊ばせてやってくださいよ。

一同、「二月」を先頭に出て行く。

「新しい年」窓から見送る。

やがて机の前にもどって来る。

新しい年 さあ、これでまず一段落すんだ。これでいい、これでいい。

と、得意げにいすにすわる。

—幕—

### 第三場 またもの「年」のへや

第一場と同じ「年」のへやである。「新しい年」が、疲れていら／＼しながらへやじゅうを歩きまわっている。

電話のベルが鳴る。

新しい年 もし／＼。(あ、もし／＼。こちらは「三月」です。) あ、「三月」君ですか。どうです。ぐあいは。(え、うまくいっています。) 子供たちは喜んでいますか。(え、今までこんな陽気は見たことがない、冬みたいで夏みたいだと言って、喜んでいきます。) 喜んでいて、そりゃ結構です。それでこそ、今までにないやり方をしたかいたかいたというものです。で、御用は。(い、え、たじ、その御報告をしたかったので、別に用じゃありません。) あ、そうですか。それはわざわざありがとうございます。どうかしっかりやってください。(え、御安心ください。ではまた。) じゃ、御願いますよ。さようなら。(ごめんください。)

電話、切れる。「新しい年」、満足そうに歩きまわる。

新しい年 子供たちは、冬みたいで夏みたいだと言って喜んでいてと言ったな。それはそのはずだ。十二人の「月」が一ぺんに飛び歩いているんだものな。これでいいんだ。これでこそ今までになかったほんとうに新しい年になった。

戸をたたく音。

新しい年 あや、だれか来たな。おはいり。



「二月」がはいつて来る。

新しい年 やあ、「二月」君か。さ、さ、こつちへおはいりなさい。いろ／＼と御苦労さまです。

さぞおいそがしいでしょう。

一月 いそがしかろう……とおっしゃるんですか。

新しい年 え、どうしてです。いそがしくないんですか。

一月 いそがしいにも、いそがしくないにも、どうにもこうにもお話になりません。なにかもめ  
ちゃくちゃです。

新しい年 めちゃくちゃ、それはまたどうしてです。いまして「三月」君から、うまくいって  
いると電話をかけて来たばかりです。

一月 「三月」ですって、あいつはあてにならないやつです。いいかげんな、氣の変わりやすい男  
です。ですから、人間たちも三月のお天氣はあてにならないと言っているくらいです。

新しい年 で、なんの御用でしょう。

一月 実はみんなでありいってお願いにあがったのですが。

新しい年 お願い。みんなで、なんですか。

一月 困ってしまいましたので、みんなが集まって相談した結果、私が代表で参りましたのですが。

新しい年 代表で。で、みなさんは。

一月 外で待つております。

新しい年 そりゃいけない、みなさんも中にはいつてもらつて下さい。

「一月」戸をあけて呼ぶ。「二月」以下「十二月」まで、「三月」を除いて十人が、はいつて来る。

新しい年 おや／＼、みなさんごいっしょですね。どうしたというんです。

一月 私たちはおっしゃる通り、みんなでいっしょに働きました。そしてできるだけのことをした  
つもりです。けれども、結局なんにもならないことがわかったのです。

新しい年 なんにもならない、というと。

一月 何もできないのです。子供たちを遊ばせてやりたくとも、どうにもならないのです。

新しい年 どうしてです。

一月 私や「二月」君や「十二月」君は、雪と氷で子供たちを遊ばせることしか知りません。けれ  
ども、私たちがいくら雪や氷を持って行っても、「七月」君や「八月」君がそばを通ると、みんな  
溶けてしまうので、子供たちはことしになってから、まだ一ぺんもスキーやスケートやそりで遊  
べません。

四月 私たちもそうです。私と「五月」さんは、木や草の芽を呼びさまして、野原や山を緑色にし  
ます。そして子供たちにピクニックやハイキングをさせて遊ばせるつもりなのですが、いくらい  
っしょうけんめいによつても、私たちのあとから「十二月」さんや「一月」さんや「二月」さん  
が通ると、芽がみんなこぼえて死んでしまうのです。

八月 ぼくたちもそうです。ぼくたち夏の「月」は、水遊びや山登り、とんぼつりやせみとりで子  
供を遊ばせるつもりなのですが、子供たちが水遊びをしようとして裸になると、急に寒くなるの  
で、風をひいてしまいます。とんぼやせみは、みんな、土の中から出て来ません。



十月 「四月」さんや「五月」さんたち春の月が芽を呼びさましてもみな枯れてしまうので、私たちは何もする仕事がないのです。赤や黄に色を染め変えてやる木の葉がありません。花が咲かないのですから、木の实やくだものだって実らせようがありません。第一に子供たちはあまり陽氣が変わるんで、風をひいてせきをしたり、くしゃみをしたりしています。

新しい年 そりゃいけない。どうしたらいいでしょう。

一月 どうしたらいいか、われ／＼にはわかりません。私たちはたゞあなたのおっしゃる通りに働くほかありません。あなたのお考えでこうなったのですから、どうしたらよいかもあなたがお考えになるほかありません。

新しい年 だから、みなさんもぼくといっしょに考えてくださいとお願ひしているんです。

一月 でも、私はことはじめてこんなことをしたのですから、どうしたらよいかなどということ、は、とても考えられません。

「月」たち一同、がや／＼とめい／＼に何か言いはじめる。

新しい年 よろしい。では僕は三月君に相談してみます。「三月」君はどこにいます。

一月 さあ、どこですか。あいつだけは今度のやり方を喜んで、そこらじゅうとび歩いていますから。

「新しい年」戸口へ行って外へ呼びかける。

新しい年 ……「三月」くうん。「三月」くうん。(遠くで返事が聞える。)おうい、ちよつと来てくれたまえ。

やがて「三月」急いではいつて来る。

三月 おや／＼、みんな、集まっていますね。なんの御用でしょう。私は今、とてもいそがしいんですが。

新しい年 いろ／＼困ったことが起つてしまいました。まあ、こっちへ来て聞いてください。

三月 何をそんなに困りなんでしょう。

新しい年 うまくいかないんだ。みんなに一ぺんに働いてもらったのだけれど、結局なんにもならないんだ。

三月 そんなことはありません。さつきもお電話したように、子供たちは珍しがって喜んでいます。

新しい年 でも、子供たちは何もして遊べないそうじゃありませんか。

三月 え、でも、窓から外を見て楽しんでます。

これを聞いて、一同がや／＼と騒ぎはじめ。口々に「三月」の悪口を言う。

新しい年 みなさん、待ってください。そう一度にみんながしゃべってもわかりません。

三月 ひとりずつ言いたまえ。ひとりずつ言わなくっちゃはつきりわからない。

十二月 そうさ、だれもおまえといっしょにしゃべりっこをする者はいないからな。

新しい年 まあ／＼、そうけんかをしなくて静かにしてください。とにかく今うかぶったようなことでは、どうにもしかたがありません。なんとかみなさんがそれ／＼の得意なお仕事で、子供たちを喜ばせてくださらなくてはなんにもなりません。では「十一月」さん、あなたはどうすれば子供たちを楽しませることができますか。

十一月 私は「八月」君たち、夏受持の諸君が、くだものを十分大きくしておいてくれさえすれば、



それを赤く熟したおいしいくだものにしてやれるのです。

十月 私も夏の間に、木の葉が青く大きくなってさえいれば、赤く染め変えられます。

九月 私もそうすれば木の葉を黄色く染めますし、涼しい風を吹かして、夏の暑さを忘れさせて、学校の勉強を始めさせます。

新しい年 では、「八月」君は。

八月 私は「七月」君さえ準備をしておいてくれれば、暑い／＼真夏の太陽を持って行って、水浴びをしている子供たちのからだをまっくらにして、冬になっても風をひかないようにしてやります。

七月 私は、「六月」君がゆの雨をどん／＼降らして、いろ／＼なものが生長する準備をしてくれれば、それを「八月」君に引き渡してやれます。

六月 私は、「五月」さんが春から夏になる用意をしてくれて、いいお天気が続けて、雨をためておいてくれさえすれば、ゆの雨をたくさん降らせてやります。

新しい年 じゃ、「五月」さんはどうです。

五月 私は、「四月」さんが木や草の種をまいて、目をさましておいてくだされば、ゆっくりとやさしい子守歌を歌って、その芽を育て、花を咲かせ、葉を茂らせてやれますわ。

四月 私は、「三月」さんが冬の寒さをやわらげておいてさえくだされば、種をまきますわ。

三月 ほら、じゃ、結局ぼくがみんなの一番のもんじゃないか。

一月 そうはいかないよ。われ／＼冬の寒さがあるから、はじめて春の暖かさがわかるんじゃないか。

しか。

新しい年 わかりました。今のみなさんのお話をうかゞって、よくわかりました。すべて規則通りにできているのですね。規則通りに順番をきめて、順番に働いてもらうのが一番よさそうです。

「一月」君はどう思います。何かいい考えがありますか。

一月 これまで通りにするのが一番いいと思います。

新しい年 これまで通りというのと。

一月 一月にひとりずつ、つまり十二人が一月ずつ順番に働くのです。はじめの月は私がやり、次の月を「二月」君がやるというわけです。つまり暦通りということですよ。

新しい年 なるほど、今まで通りということですね。「一月」君の次が「二月」君、そのあとが「三月」君。

三月 そうです。私のあとが「四月」さんと「五月」さんで……。

新しい年 きみは、黙っていてくれたまえ。

三月 ……………

新しい年 つまり番号順ですね。

一月 え、昔からこの順番でやっています。それが一番まちがいのない道なのです。

新しい年 わかりました。……さて諸君、思うところがあって、私は私の考えた新しいやり方をやめて、これまで通りにやってみることに決心いたしました。

「月」たち、喜んで拍手する。



三月 それはとてもすばらしいお考えです。私も大賛成です。

新しい年 きみは黙っていてくれたまえ。みなさんおわかりですか。今まで通りにするのです。私  
が新しいと思つてやったために、みなさんにいろ／＼と御迷惑をかけて申しわけありません。私  
は十二人が一月ずつ働くのと、十二人が一ぺんに働くのと同じことだと思つていました。つまり  
1×12と12×1とは同じ答ですから、同じことだと思つたのです。それが私のまちがいでした。  
おわびします。……さ、ではさっそく「一月」君からお願ひします。あとのみなさんは、自分の  
番の来るまでは、ゆっくりと休んでいてください。いろ／＼と御苦労さまでした。

「二月」を残して、あとの「月」たち、ロクに別れのあいさつをしながら出て行く。「新しい年」見送る。

一月 では、行つてまいります。

新しい年 あゝ、ではよろしくお願ひしますよ。子供たちをおもしろく遊ばせてやってください。

一月 承知いたしました。

「二月」も出て行く。「新しい年」、ひとり残る。ぼんやりと机の前にすわる。

新しい年 ……おかしいな、1×12は12だ。12×1も12だ。それなのにうまくいかないなんて、ど  
ういうわけだろう。

「新しい年」、考えこんでしまう。

やがて、遠くで子供たちの遊んでいる声が聞える。

新しい年 おや、子供たちの声だな。(と、窓の所へ行き、見おろす。)あゝ、子供たちがそりに乗つて  
遊んでいる。喜んでいる。あゝ、ころんでもまたすべっている。……これでいいんだ、これでい

いんだ……。

—— 静かに幕 ——

(二に十二をかけるのと十二に一をかけるのと)

### 研究

- 一 古い年、新しい年の対話を比較して、両者の考え方の違いについて話しあつてみよう。
  - 二 十二月の「月」の、それ／＼の特徴を、どんなふうに擬人化しているか、表に作つてみよう。
  - 三 「十二月」の服装を参考にして、他の「月」の服装も、それ／＼ふさわしいものをくふうしてみよう。
  - 四 「ほたるの光」は、どんな場合に歌われる歌か、劇の効果をあげる歌の使い方について考えてみよう。
  - 五 「ほんとうの意味での新しい年」とは、どういう意味か。
  - 六 この脚本を読んだ感想を述べてみよう。
  - 七 この第一場と第三場との間に起つたと想像される、人間界、ことに子供の世界での異変について、
- 八 右のお話のうち、すぐれたものをみんなで選び、それをもとにして、新しい劇の場面を作つてみよう。この原作は、三場からなっており、第二場「隆一君のへや」というのがあるのだが、こゝには省略したのである。みんなで共同して、第一場、第三場にしくりするような第二場を、原作にとられないで作つてみるのはおもしろいであろう。
  - 九 また原作にはないが、第三場の前に、三月以外の十一月の「月」たちの相談の光景を想像して、一つの場面を作ることでもできるであろう。
  - 十 この脚本の筋を、物語に書きなおして、みんなの前で話してみよう。
  - 十一 初対面の人のあいさつのしかたや、人々が



集まって相談をする場合の話のしかたなど、この脚本について話しあおう。

十二 電話のかけ方について、注意すべきことを話しあってみよう。

## 五 研究

一般に研究は、いろ／＼な疑問から出発して正しい理解に到達し、ひいては社会の文化を進歩向上させ、人類の幸福を増進することを目的とする。われ／＼の研究もまた、決してこのことと離れてあるわけではない。しかし、その目的を達成するための第一目標は、その時その時の疑問を解決すると同時に、研究とは何か、研究するとはどうすることかということを、経験を通してほんとうにわかってゆくことでなければならぬ。われ／＼は研究することによって研究的な態度を養い、その態度によって知識を求め、常に向上してゆくことができるのである。

その時自分の研究に対する他人の意見を聞くことはたいせつなことである。研究の目的から言っても、ひとりよがりにならないよう注意すべきである。自分の考えの欠点を知り、またはその正しさを確信することのできるのも、多くの人の意見を聞くことによつてである。

人の意見を求めるにも、自分の研究について発表することが必要であり、発表にあつては、自分の考えの基礎を確立すること、既知と未知との区別をはつきりさせること、更に議論の分かれそうな点を明示することがたいせつである。こうして自分の研究の結果を整理し、順序を立てて、わかりやすく説明することに努めなければならない。だから発表するということは、自分の研究について自ら精査し反省することであるのであつて、このこと自体が、すでに自分自身にとつてきわめて有益な仕事となるのである。だから特に発表する機会や必要のない場合でも、研究した結果を記述しておくようにすべきである。

われ／＼は、今までは社会科学をはじめ各科の学習において、しばしば研究論文を書き、調査報告書を作つた。次の文章なども参考にして、自然のなご、人生の疑問の意義とその解き方、研究のまとめ方、発表のしかたなどについて、更に反省し、今後、更にすぐれた疑問の解決、研究発表ができるよう努力しよう。

「一」なぞ

木々 高太郎

なぞでないなぞ

正夫君が遊びに出ると、すぐ町のかどのところで、なかのよい友一君に会いました。すると、友一君は、いきなり言いました。

「正夫君、なぞを解いてみたまえ。」

「うん、かけてみて。」

「よしから、ナポレオン知ってるか。」

「うん、フランスの。」



「そうだ。ナポレオンはなぜ青いズボンつりをしていたかってんだ。」

正夫君は考えましたが、わかりません。すると、友一君はにや／＼笑って、

「それはね、ズボンが落ちると困るからさ。」

と答えました。

正夫君は、この答を聞いて、どこかおかしい、答になっていない、と考えましたが、わかりません。それでくやしかったけれど、うなづくよりしかたがないのでした。

「もう一つ、どうだ。」

「うん、言ってみろ。」

「よし、犬が夕日に尾を向けて立っていた。ところが東の方へも尾が向いていた。犬はどういうように立っていたのだね。」

正夫君は、考えました。しかし、尾が西にも東にも向いているように犬が立っていることは、どうしてできないはずですよ。

「わからないだろう。これはね。二匹の犬が、一方は東向き、一方は西向きに立っていたのさ。」

正夫君は、今度はいきなりくやしくなりました。

「もう一つ出すぞ。いいかい。眠る時に、だれでも目を閉じるだろう。耳はなぜ閉じないか。——どうだい。」

「それは——。」

「わからないだろう。答は、耳にはまぶたがないからさ。」

「なあんだ。わかったぞ。」

「何が。」

「そんななどなら、ぼくだって作ってみせる。」

「作る。」

「うん。」

「じゃあ、作ってみたまえ、ぼくが解くから。」

「ようし、少し待ってくれ。」

正夫君はしきりに考えています。しかし、なか／＼いい考えが出ません。

「どうだ。できないだろう。おと／＼いあうぞ。」

友一君は、そう言って、勝ちほこって向こうへ行ってしまった。正夫君は、くやしいので、遊ばないでうちに帰り、机の前にすわって考えていますと、おかあさんが、「この新聞を、離れのおじさんのところに届けてください。」と言いつけました。

正夫君は、それを受け取って、離れへ持って行きました。

すると、おじさんが尋ねました。

「なぜ／＼は好きかい。」

正夫君は、今、友だちからなぞでいじめられたばかりでしたから、首を振りました。

「はい、あ、きみぐらいの子供が、なぞ／＼がきらいなわけではない。さては、お友だちとなぞ／＼をして、負けて帰って来たね。」



ずぼしをさされたので、しかたなく、正夫君は友一君のなどの話を、おじさんにすっかりいたしました。

「そうか。きみが、そのはじめになどをへんだと思い、次に自分でも作れると思ったのは、ほんとうによかったね。きみの考えた通りだよ。それはほんとうのなどではないよ。だから、またいくらでも作れるよ。作り方を教えよう。いいかい。」

そう言つて、おじさんは話しました。

「二階家がある。ねこが階段をのぼる。それを次のようになぞにする。いいかね。『ねこが二階までのぼつて三階にはどうしてものぼらなかつた。なぜだ。』その答が、『二階しかなかつたから。』となる。

老人が車を引いて、若者があと押しをしていた。老人に向かつて、『あと押しをしているのはあなたのみすこですか。』と聞くと、『そうです。』と言ふ。今度は若者に向かつて、『車を引いているのはきみのおとうさんかね。』と聞くと、『いいえ違います。』と答えた。このふたりはどんな間からであるう、というのがなぞだ。その答が、『ふたりは親子である。たゞし、むすこの方がうそをついたのだ。』ということにしたらどうだ。

「いいかい、正夫君、このようななぞのうちには、必ず、一つのしかけがあるのだ。そのしかけは、三階がありそうな言い方をする、実はない、ということさ。うそは両方ともつかないはずだと思わせておく。実はうそをついたのである。そう考えると、いくらでも作れるよ。」

正夫君は、おじさんの話を聞いているうちに、うまいことを考え出した。

「おじさん、ぼく、そのなぞなら作れます。」

「そうか、言つてごらん。」

「お金も定期も持っていない子が電車に乗つた。さぞ困つたらうと聞いたら、その子は、『いや、ちつとも困らなかつた。』と言ひました。」

「うまい、うまい。——その子はそこで電車をおりてしまつたのだ。」

正夫君は、

「ぼくはこう考えました。車掌さんが知ってる人だつた。」

と言ひますと、おじさんは笑つて、

「よろしい。とにかくぼくたちは、そのようななぞを作るしかたがわかつた。すると、ほんとのなぞと違ふところがわかるはずだよ。いいかい。なぞを解くということは、與えられた條件を正しいものとして解かなければ、実際に合う答は出てこない。ところがなぞのうちの與えられる條件の一つか二つかに、あいまいなもの、またはまちがつたものを出して、それを正しいと思ひこませるようになればなぞでないなどはいくらでもできるよ。——しかし、ほんとのなぞは、そうではない。ほんとのなぞを解くには実力がいるし、解けたらうれし。」

「自然科学者の偉い人は、自然のかけたなぞを、まず眞のなぞとにせのなぞと分けてからかゝつたので偉くなれたのだ」と、おじさんは言ひました。

北牛と南牛のなぞ

「おじさん、それではほんとのなぞのお話を一つしてください。」

正夫君は、なぞでないなどの話のあと、そう言つて、おじさんにせがみました。



「発疹チフスって、どんな病気が知ってるね。」

「え、今、はやってます。」

「それは腸チフスと同じかい。」

「いえ、全く違います。」

「どこが。」

「腸チフスは、食べ物や飲み物からはいりません。菌がわかっています。発疹チフスはしらみでうつります。菌も別のものです。」

「そうだ。よくできたね。——では、北牛と南牛のなぞをお話しよう。おじさんはそう言っていて、アメリカ合衆国の牧場の話をしてくれました。」

「アメリカは広い。五十年ほど前のことだ。南部の牧場では、牛がテキサス熱という流行病のためにどん／＼死んでいった。そこで牧場主は北部の牛を買い入れて南部に持って来る、助かった南部の牛といっしょに牧場に入れた。すると、北部の牛はどん／＼死んだ。」

助かった南部の牛を北に持って来る。すると、いっしょに牧場に飼った北部の牛が死ぬのだ。なぜだろう。それは病気がうつったのだね。それにまらがない。ところがなぞがある。セオールド・スミスという学者が、南部の牛のいた牧場の草を北部の牧場に持って来て置いておいても、北部の牛は死ぬ。牛から牛にうつるのではない。草からうつるのだ。なぜだ。」

「それは、おじさん、南牛の排泄物に菌がいます。その菌のついた草を北牛が食うからでしょう。」

「わかりました。その草にしらみがついています。そのしらみが北牛について血を吸うと病気がうつるのでしょう。」

「正夫君、いい考えだよ。ところでしらみが牛についているだろうか。草にしらみがついているだろうか。」

正夫君は少し考えていましたが、すぐにわかりました。

「しらみでなければ、しらみみたいな牛の血を吸うものですよ。きっと何かいます。」

「うまい、うまい。しらみのほかに血を吸うものがあるだろう。」

「蚊か、のみか——です。」

「ほかにはないかい。」正夫君は、じっと考えました。

「わかった。わかった。うちの犬に、もうせん、だにがつきました。だにでしょう。」おじさんはびっくりしたような顔をして、正夫君をながめました。

「だに——そうだ。正夫君、スミスはだにが媒介をすることを発見した。ところが、まだなぞがある。だにがなぜ草についてるか——。スミスはだにが牛から血を吸って草に落ちて子を産む。その子だにが北牛にはい上がって、だにとなつてつくと、北牛に病気をうつすことを、やがて明らかにした。それでおしまい——。」

「まだおしまいではありません。」

「なぜ。」

「そうすると、南牛のからだには菌がいますね。それなのになぜ北牛だけ死んで、南牛は死なない



のでしよう。」

おじさんは、とう／＼ほんとにびっくりしました。

「そうだ、そこにもう一つの自然のなぞがある。あすはそのなぞをふたりで考えることにしようね。」

免疫のなぞ

アメリカの南部の牛は、テキサス熱の病氣を自分のからだのうちに持っているのに死なないのはなぜか。——それは正夫君の考えたりっぱななぞで、ほんとのなぞでした。

このなぞを解くのに、正夫君は翌日まで、もう幾つも考えを持っていました。

「このなぞはね、ほかにも同じようななぞがあることがわかると、すぐ答が出るよ。」

おじさんがそう言った時には、正夫君は勢いよく答えました。

「はしかは、一度かゝるともうかゝりません。」

「よろしい。ほかには。」

「腸チフスは、一度かゝるともうかゝりません。」

「よろしい。その二つのなぞがあることに気がつく、それで十分なくらいだよ、正夫君。」

「では、南牛はテキサス熱に一度かゝってなあっているのでしようか。」

「まさに、その通りだよ。南部にはいたるところにテキサス熱の菌がいる。どんな牛でもかゝる。

だから生きてる牛は、一度かゝって死ななかつたものだけだ。だから南牛というのは、北牛と違うものばかりだ。——そう考えれば、このなぞはなんでもなし。しかし、ではなぜ一度かゝって、それで死なないで生きていけば、それは二度めにかゝってもなんでもなしのだから。」

「わかりました。三を三つ寄せると九になるということを一度覚えてしまうと、あとは数えてみないでも九だということがわかるのと同じですか。」

正夫君が、そう言うと、おじさんはしばらく考えていました。

「そうだ、そうだ、それに似ている。しかし、それはなぜだろう。」

「それは覚えているからです。」

「そうだ。では覚えているのは、何か残っているのだね、からだの中に。」

「わかりました。ぼくの頭の中に、そのことが残っているのです。」

「よろしい。では、一度病氣にかゝってなあって、その病氣からなある方法を覚えているのかね。

頭のうちに覚えているのかね。」

「さあ、ぼくははしかをしたそうですが、何も覚えていませんね。」

「では、頭の中に覚えているのではないね。からだのうちに覚えているのだね。」

「はう。」

「よろしい。からだのうちに覚えているということはなんだろう。それは、いろ／＼の病氣で、コッホ・ベーリッング・北里柴三郎などの学者が発見している。つまり、私どものからだは、その病氣をやっつけるものをつくるつくり方を覚えているのだ。——もっと別にいえば、私どものからだは、病氣をやっつけるもの、その病氣の力を弱めるものをつくるのだ。——つくることができるよう慣れくるのだ。ちょうど冬に薄着をしていると、寒さに慣れるように。——少しずつ薄着をしてゆくとだん／＼慣れるように——軽い病氣にかゝる、すなわち死なない程度にかゝると、そうなるのだということがわ



かった。」

おじさんは、そのように一度軽く病氣にかゝって、あとからはこの病氣にかゝらぬようになることを、一般に免疫というと教えました。

すると正夫君は「でも何度もかゝる病氣もあるではありませんか。」と言いました。

「そのなどはむずかしくない。病氣に二つの種類があつて、免疫のできるのできないのがあると考えればね。」

トランプのなぞ

「さあ、きょうは一番むずかしいなどをかけてみよう。」

その日は、おじさんのところに正夫君が行くと、いきなりおじさんはそう申しました。

「これは解けまいと思うが、もし解けたらたいしたものだよ。」

「ようし、解いてみる。さっそく、かけて——。」

「よし／＼。こゝに、トランプが五枚ある。三つは赤で、二つは黒だ。いいかね。そして人が三人いる。今ぼくが、その三人の人の背中に一枚ずつトランプをはりつける。」

「二枚残りますね。」

「うん。その二枚は、だれにも見せない。——そこで、三人の人に、他の人の背中を見せる。第一の人は、自分の背中の中の見えないが、第二の人と第三の人の背中の中の見える。」

第一の人に聞いてみる。「きみは、第二の人と第三の人の背中のトランプを見てごらん。そして自分の背中のトランプの色はなんだか考えてごらん。わかりますか。」と聞いた。

第一の人は、トランプが全部で五枚、そのうち赤が三つ、黒が二つあることを知っている。この人は、もし第二の人も第三の人も、黒いトランプをはりつけられているのを見たら、すぐに自分の背中の色をあてるだろう。なんとあてるか。

「そんなことは、わけないや。赤だということはすぐわかります。」

「そうだ、そうだ。それでよい。」

「ところが、その第一の人は、ゆっくり考えていたが、『わかりません。』と答えた。

そこで、今度は、第二の人に、第一の人と第三の人の背中を見せた。すると、第二の人も、ゆっくり考えて、『わかりません。』と答えた。

今度は、第三の人に、第一の人と第二の人の背中を見せた。すると第三の人は、しばらく考えていたが、次のようにおもしろい答をした。

「第一のかたも、第二のかたもわかりませんと申しました。もし、正直にそう答えたのなら、ぼくにはわかります。』そう言つて、色をあてた。その答は正しかった。——いいかい。第三の人は何色と答えたか。そして、どうしてそれがわかったか。——それがなぞだよ。」

正夫君は考えてみました。しかし、考えただけではよくわかりませんので、絵をかきました。

- |     |   |   |   |
|-----|---|---|---|
|     | 1 | 2 | 3 |
| (a) | 赤 | 赤 | 赤 |
| (b) | 赤 | 黒 | 赤 |
| (c) | 赤 | 赤 | 黒 |
| (d) | 黒 | 赤 | 赤 |



正夫君の絵では、ふたりとも黒であったものではありません。だから、ふたりが赤で、ひとりが黒なのは、この絵の(b)か、(c)か(d)だったはずで。ところが、正夫君は、とうとう次のような答を言いました。

「おじさん、このなぞにはごまかしがあります。第三の人にわかるわけがないです。」

「そうかい、では説明してごらん。」

「いいですか。」

正夫君は、そう言って、説明しました。

「(a)の場合は、みんなが赤ですから、1が見ても2が見ても3が見ても、残ったトランプが、黒か赤かどちらでもありますから、3の人にわかるわけはないです。」

「(b)の場合でも同じで、1、2が赤黒ですから、3の人にはわかりません。自分は赤でも黒でもありません。」

「(c)の場合も同じで、1、2も赤ですから、自分は赤か黒かどちらでもあります。」

「(d)の場合も同じで、1、2が黒赤ですから、3の人には、自分は赤でも黒でもはりつけられるわけです。だから、わかりません。」

「その通りだよ。だからこの四つの場合ではなかったのだよ。」

「ふたりとも黒でないならば、この四つの場合しかありませんから、このなぞはだめです。わかるわけがありません。」

正夫君は勝ちほこったように、おじさんのなどの出し方がまちがっている、と申しました。

「よし、よし。私どもは、ふたりともに黒ではない——とはじめに言ったね。しかし、よく考えてごらん。1の人が2と3を見て、ふたりとも黒ではないと言ったんだよ。2の人が1と3を見てふたりとも黒ではないと言ったんだよ。」

「わからないなあ。」

「ふたりとも黒の場合、つまりひとり赤でふたり黒の場合を、きみは考えてみないじゃないか。絵をかいて考えてごらん。」

そこで、正夫君は次のような絵をかきました。

	3	黒	赤	黒
	2	黒	黒	赤
	1	赤	黒	黒
(e)				
(f)				
(g)				

「わかるかわからないか、よく考えてごらん。」

「はい。(e)の場合。1の人はこれではわかりません。自分が赤です。ところが1の人はわからな」と言ったのですから(e)の場合ではありません。」

「その通りだ。(f)の場合は。」

「1の人は、黒と赤とを見たのですからわかりません、と言ったのは正しいです。また2の人も黒と赤を見たのですから、わかりません、と言ったのは正しいです。3の人は、この場合には、自分が赤だとわかります。」



「そうだ、そうだ。念のため、(g)の場合はどうかね。」

「はい、(g)の場合は、1の人は赤黒を見たのですから、わかりません、と言います。2の人は、黒黒を見たのだからわかると言わなくてはなりません。すると、(g)の場合ではないです。」

「そうら、どうだ。すべての組み合わせのうち、(f)の場合だけになった。すると3の人は、自分の背中のトランプの色を、なんと言った。」

「赤だと言いました。」

「それはいいが、しかし、おかしいね。もし1も2も黒なら、3の人が、第一の人も第二の人も正直に答えているならばわかります、などと言うはずはないよ。」

「そうです。そうです。すると。」

「もう一度(a)から(g)まで調べてごらん。」

そこで正夫君は、もう一度調べてみました。すると、(d)の場合に、3の人は次のように考えたに違いなことを発見しました。

「3の人は、もし自分が黒ならば、1の人にはわからないが、2の人にはわかるはずである。(g)と同じ。」それなのに、2の人にもわからないとすると、自分は赤だ——と。そこですべて説明がつきます。」

「よろしい。その通りだ。3の人は赤だった。そして、1の人が黒だったから、自分にはわかったのだ。もし1の人が赤だったら、3の人も、同じ考え方から、自分もわからないと言ったに違いはない。解けた、解けた。どうだい、むずかしさは。」

「二番むずかしかったですよ。このなぞは——おじさん。でも、一番おもしろかったですよ。」

(雑誌「週刊少国民」)

### 研究

一 筆者の言う「なぞでないなぞのしかけ」とはどういうことか。自分でも、そういうしかけを持つたなどを作ってみよう。

二 「にせのなぞ」の作り方・解き方を研究してみよう。

三 「自然のかけたなぞ」とはどういうことか。

四 「からだのうちに覚えている」とはどういうことか。

五 正夫君は、どうしてはじめの絵をかいたか。

六 正夫君は、どうして第二の絵をかいたか、おじさんのどんなことがヒントになっているか。

七 正夫君のような絵のかき方のほかにまだ絵のかき方がないか。第一の人が見た、第二の人、

第三の人の色を想像し、それに第一の人の色を想像して絵をかいてゆくような方法によってみ

んなの色を想像する方法をくふうしてみよう。そして、正夫君の説明やおじさんの注意のように、一つ一つ吟味してみよう。

八 筆者は、「にせのなぞ」と「ほんとのなぞ」とを区別しているが、「ほんとのなぞ」は、どのように分類することができるか。トランプのなぞの類は、なぞを解く手がかりがみんなそのなぞのうちにあるもので、答のきまつているなぞである。自然のなぞは、自然界のいろ／＼のことの起るわけを証拠を求めて解いてゆくものである。このほかに、歴史のなぞともいう、人間の事件を解くなぞがある。犯人をさがすことなどもこれにはいるが、これはどれがほんとの答かわかりにくいものである。自分の知っているなぞを、こういう分類によって整理してみよう。



九 おじさんと正夫君との対話のしぶりから、おじさんの年齢を考えてみよう。また、正夫君の

話しぶりを批評してみよう。

〔二〕 擬声語の収集

湯沢幸吉郎

擬声語とは、動物の鳴き声をはじめとして、自然界に発する音響を人間の音声で模倣したものをい、擬態語とは、事物の活動や静止の状態を、われ／＼の音声に写したものをいうのである。たとえば、犬は実際に「わん／＼」と鳴くのではなく、時計の音も実際は「かち／＼」というのではないが、われ／＼は「わん／＼」「かち／＼」という音声を犬や時計の音として用いるのであって、これらが擬声語と言われるものである。また玉のころがるさまを「ころ／＼」、人の落ち着かぬさまを「そわそわ」という音声に写したのが擬態語である。しかし、語によっては、擬声・擬態のいずれであるか不明のものもあり、また実際にいずれにも用いられるものもある。この二つをしいて区別する必要のない場合も多いから、こゝでは特別の場合のほかは、擬声語を廣義に解して、双方を含ませることにする。

さて、現代口語における擬声語は、主として副詞に現われるが、それらは普通次のような形をとっている。

一 語末に「と」がつく。

わんとほえる。かんと鳴る。ぱっと飛び立つ。

もつとも、三音以上のものは「と」を省いても用いる。

二 疊語が多い。

ぶる／＼ふるえる。ぱったり倒れる。

とん／＼(と) ばた／＼(と) ぞろ／＼(と)

時には最初の音を変える。

あたふた じたばた どたんばたん どさくさ めちゃくちゃ

三 語頭以外にラ行音、特に「り」の用いられることが多い。

かたり(と) ことり(と) しっかり すっかり のんびり はっきり ぐたり(と)

四 ナ変動詞「する」といっしょに、一語のようになって現われ、更に「た」がついて、形容詞の連体形のように用いられる。

ちら／＼する うんざりする しゃんとした人 ひつつりした男 ごわ／＼したゆかた

擬声語は、口語では右のような形をとることが最も多いが、文語においてもだいたい同様である。

これらの擬声語は、古くはわが文学の上にも普通に現われていたが、だいたい鎌倉時代以後、廣く漢語を取り入れた文が行われだしてからは、次第に避けられるようになった。そして、「きらり」「にこり」と言うところを、「閃々」「莞爾」と言うようになり、「うっとり」と言うところを「惺惚」としなればならないように考えられた。すなわち、國民は一時、あまりに漢語・漢字にとられるようになり、固有の擬声語を忌避するようになったのである。江戸時代にはいつて平民が学が起るようになると、このような状態から脱する傾向も現われたが、漢字や漢語に対する執着の捨てきれない人々は、なおすこぶる多かったのである。このような関係から、現に今日でも、いわゆる文語体の文章の中で



は、「断乎」<sup>だんこ</sup>「判然」<sup>だんぜん</sup>「洋々」などのような語を用いなければ学にうといような感を興え、「うんざり」<sup>うんざり</sup>「がっかり」などのような語を用いると、文章としての品位が低くなるというように思われるようになったのである。擬声語の中には、さすがに捨てかねたものもあったが、なおなまのまゝでは何か気がすまず、これを漢語らしくするために、「きつと」「ちよつと」「はつしと」「そつと」「がら／＼」「ちよど」「むんずと」「さつと」「おうと」「ぐず／＼」などをわざ／＼漢字で表記する例さえ生じた。以上は、ひろく通例筆写の上に現われることであるが、口語においては、各時代とも、依然として固有の擬声語が盛んに用いられたことは、疑いのないところで、それはいろ／＼な資料によって容易に証明することができる。

あらゆる言語は、單獨にもしくは他と結合した上で、なんらかの意味を表わすことは、いうまでもないことであるが、このような擬声語は、一通りの意味を表わす以外に、それを用いる場合の話し手の心の中の細かい状態、すなわち気分までをも一まとめにして、端的に最も雄弁に語るものである。この相違をたとえて言えば、普通の語は模型であり標本であるが、擬声語は生きたものそのものであるかのような感を興えるのである。したがって、擬声語を広く深く研究すれば、その民族がそれ／＼の音声をいかに感じていたかが判明するはずである。國語の清音とそれに相当する濁音との間に、大小・多少・強弱・鋭鈍・遅速・動靜等の差のあることは古くから説かれているが、擬声語においてもこれと同じようなことが考えられはしまいかと思われるのである。たとえば、「あつと」「かつと」「きつと」「ぐつと」「さつと」「はつと」「ふつと」などの例から、促音は「急促の意」を表わしているものとも考えられ、また「かん／＼と」「ぐん／＼と」「ずん／＼」「ちん／＼」「どん／＼」「や／＼」「からん

「ちりん」などの例から、撥音に「停滞しない意」「輕快の意」があるとも見られるのである。もちろんこれらの少数の例だけから判断するのは危険であり、また促音や撥音の例からだけ見て断定することもできないが、少なくとも、そのようなならかの暗示を受けるのである。

ある音声をいかに感ずるかは、同一の民族でも時代によって必ずしも同一ではない。たとえば室町時代の文献に、「田ガアテ水ガメロ／＼ト流ルナリ。」<sup>メタト酒ニ酔ウタ。</sup>「ムセリト（黙するさま）シテ物ヲ言ハヌ。」などとあるのは、その時代の人が、「メロ／＼ト」「メタト」などの音声を聞いた時の感じが、水の流れているところや、酒に酔った者などを見た時と、一致するところがあったためと解されるのである。また、動物の鳴き声でも、たとえば、今日東京へんでは、ほと／＼ぎすは「ほんぞんかけたか」と鳴くと言われているが、昔の人は「ほと／＼ぎす」と聞いたのである。もっとも、「からす」「うぐいす」などの例からも考えられるように、「す」は鳥という意味の接尾語で、鳴き声ではないかもしれない。

時代的に右のような相違があるとともに、同じ時代でも、所によって必ずしも一致しないということもある。各地の方言の中に見られる擬声語の比較対照ということが、学術的にも意義が生じ、興味の上からも捨てがたいものとなるのである。

今日方言の單語を集めている人々は、主として体言に主力を置いていようである。實際、数の上で最も多いのは体言であろう。けれども、その土地土地のことばの特色が最も鮮明に現われているのは、擬声副詞であると思われる。一つの地方から、他の地方へ移住した者は、発音や語法の上では、だいたいその土地のことばを使い慣れたとしても、その擬声副詞だけは、あと／＼までもなか／＼習



熟することができない。自分の生まれ育った土地の擬声語は、長く保たれるのであって、物の考え方や感じ方が完全に移住先の人々と同化してはじめて、生來固有の擬声語を失うことになるのである。この点から、われ／＼は、擬声語をもって地方的色彩の最も顯著に現われたものと考えるのである。したがって、その土地特有の擬声語は、他のあらゆる語をもってしても、言い換えることは不可能である。たとえば、私が故郷（秋田市の接続村）で使い慣れた「ちゃっっちゃと歩け」「ちゃっっちゃと食ってしまえ。」の「ちゃっっちゃと」は、「早く」「急いで」または「さっさと」としては、だいたいの意味は現われるが、その微妙な点は、どうして表わすことができない。また「くわんくわんとなっている。」（物のかわいて固まったのや、氷などの堅いさま）。「ぐわらぐわらくずれる。」などは、「かん／＼」「がら／＼」と言い換えては、その味が失われたことになるのである。擬声語の意の西洋語オノマトポエア (onomatopoeia) は、「音それ自身が名になる」意であると説かれることがあるが、一般の擬声副詞においても、音それ自身であるような感を與えて、他の語をもって言い換えるのを拒むような傾向があるのである。

方言の擬声語は、右のように地方色を多分に持つていて、興味のある問題を提示するのであるが、これはまた、國語の語原を考究する上に多くの暗示を與えるのである。

言語の起源として擬声語をその一つに数えるということは、今日のあらゆる言語学者の一致するところである。したがって、われ／＼の日常用いている國語の中にも、普通の人には、その成立が知られていないものでも、もと／＼この擬声から起った單語が、かなり多いのである。今思ひ出される例を少しあげてみると、鳥や虫の名の「からす」「ほととぎす」「かけ（鶏の古名）」「こおるぎ」「きりぎりす」「がちゃがちゃ（くつわむし）」などは、疑いもなくその鳴き声をそのまま、名称にしたものである。また、「はたおり」「かねたゝき」「すゞむし」などは、鳴き声を他の音にたとえた名である。

動詞では、「吸う」「すゝる」「吐く」「吹く」「かむ」などの語が人の口を用いる時の音から出た語だといわれる。これは、「すう／＼吸う（すゝる）」「ぱつ／＼つばを吐く」「ふつ／＼と火を吹き消す」「かりかりかむ」などというところから、容易にうなずかれるものと思われる。「わめく」「おめく」「うめく」などの「わ」「お」「う」は、人の音声を表わしたものであり、「ひらめく」「さやめく」などは、「ひら／＼（ひらりひらり）」「さや／＼」するさまを写したものである。「きら／＼」「きらり」から「きらめく」が生じ、「きら」は「きら星」の熟語を作り、更に「きらをかざる」などの單獨の名詞にさえなっている。名詞の「光ひかり」は、普通「光る」という動詞の連用形から生じたと言われているが、むしろその反対に、「ひかり」「びか／＼」という擬声語がもとで、それから「ひかり」「ひかる」という名詞や動詞が出たと見る方がほんとうである。今のハ行音は、上古はバ行音に発音していたことは、先輩学者の研究によって明らかにされた事実である。また、「ぐず」ということばも、「愚圖」という漢字などを当てていては、容易にその語原を思いつくことができないが、元來は「ぐず／＼」という擬音語からきた語であると思うのである。

右にあげた例でもわかる通り、動詞では「……めく」というのが最もわかりやすいが、もう一つ著しい例をあげると、「こせ／＼」「ちら／＼」から「こせつく」「ちらつく」が生ずるように、「……つく」というのがある。すなわち、「かさつく」「きらつく」「ぎらつく」「ぐたつく」「ぐらつく」「ころつく」「そわつく」「だらつく」「とろつく」「ばりつく」「ふらつく」「ぶらつく」「べたつく」「ゆらつ



く」のごときものは、いずれも擬声語からきたものと判ぜられる。

その他、接頭語的に用いられる「そぼ降る」「ぶらさがる」「ちよん切る」などのようにも用いられるのである。

以上は比較的異議のない例だけをあげたのであるが、このほか形容詞や副詞などにも、擬声語からその起源を考えることのできるものは少なくない。また、古代に用いられた擬声副詞が、今日標準的口語には姿を隠しながら、方言にそのおもかげをとどめているというような例も決して少なくないと思う。現に前にあげた私の郷里などに用いる「ちゃっっちゃつ」とは、室町時代の口語の文献には普通に現われ、また狂言などに見える「ていど（確かな意）」は、新潟縣では今も生きた副詞となつていて聞いている。そこで現在の各地の方言の中の擬声副詞を集めて考えると、従来その語原が不明とされている単語でも、たちどころにその成立が明らかにされるといふようなものが続出するのである。たとえ語原の解明に直接に役に立たなくても、少なくとも語原の考究に多大の暗示を與えるであろうとは、私の堅く信ずるところである。こういう意味から、私は擬声語の収集を諸君にお勧めしたのである。なお擬声語を収集するという場合には、その用例をもとにあげることが、ことに必要であつて、それを欠くことはどうしてもできないといふことを言い添えておきたい。

(國語史概説)

研究

一 自分たちの使っている方言と教科書のことば

とを比べて、標準語とはどういふものか調べて

みよう。

二 擬声語には、物の音などを、人の声、鳥獸の声などと區別して、特に擬音語といふことがある。擬声語と擬音語との例を考えてみよう。

三 擬声語としても擬音語としても使ひもの、また、その區別のわかりにくい場合を、例をあげて考えてみよう。

四 自分たちの方言の擬声語・擬態語で、標準語と違うものがあるかどうか、調べて例をあげてみよう。できれば、くふうして分類してみよう。

五 「一般の擬声副詞においても、音それ自身であるような感を與えて、他の語をもつて言い換

えるのを拒む。」といふのは、どういふ意味か。

「ずんく」とか「どしく」とかを、「勢いよく」「調子よく」「遠慮なく」などと比べるとか  
いふふうに、例をとつて考えてみよう。

六 擬声語をあげて、その語原を考えてみよう。

できれば、一つの論文にしてみよう。しかし、この時にも、たいせつなのは、一つ／＼の語の正しい使用方法であることを忘れないでおこう。その語の正しい用法を知り、正しく使えるのでなければ、せつかくの知識も役に立たないのである。



私たちの國語研究会

東京大学助教授

市古貞次

お茶の水女子大学助教授

江湖山恒明

東京都立日比谷高等学校教諭

佐藤正憲

白百合短期大学教授

松下宗彦

東京女子大学助教授

松村明

千葉大学助教授

山本茂男

Approved by Ministry of Education  
(Date Jan. 21, 1950)

昭和三十三年八月二十七日  
昭和三十一年一月二十五日  
昭和二十五年八月二十七日  
再版發行  
印刷

私たちの國語

二下  
定價金二十一円八十錢

著者

私たちの國語研究会  
代表者 市古貞次

發行者

東京都中央区銀座七ノ四  
株式会社秀英出版  
代表者 有光次郎

印刷者

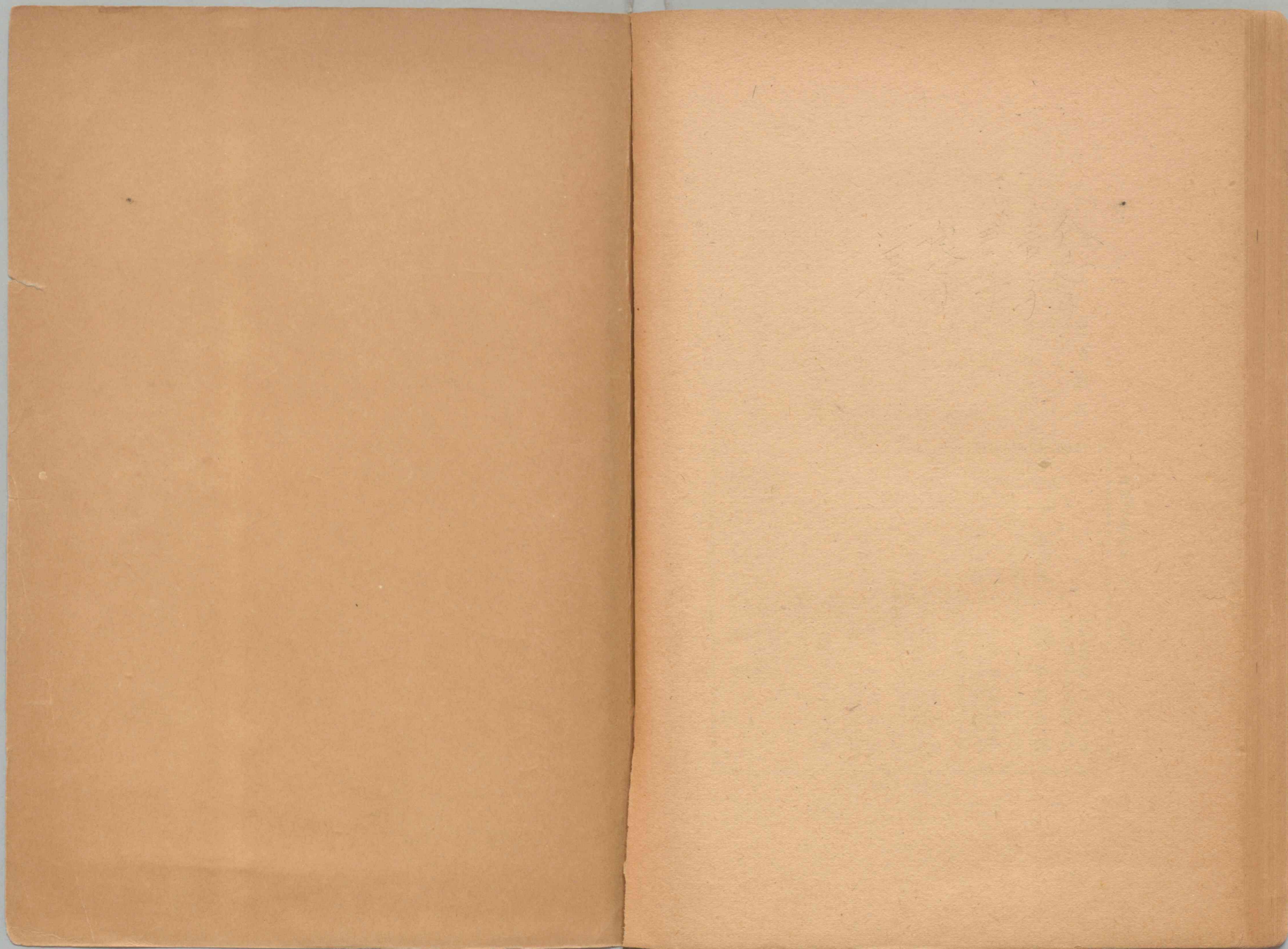
東京都新宿区市谷加賀町一ノ二  
大日本印刷株式会社  
代表者 佐久間長吉郎

發行所

株式会社秀英出版  
東京都中央区銀座七ノ四  
電話銀座座六八二五番

出版権登録済 意匠登録出願中







廣島市猿渡町  
植松  
金子

広島大学図書  
0130449657  


株式会社秀英出版



図録

### 返納期限票

(下記の日付までにお返し下さい)

返納期間	返納期間
11 11.24	13
2 1 12. 6	14
3 <del>5.9.20</del>	15
4 5.8.26	16
5	17
6	18
7	19
8	20
9	21
10	22
11	23
12	24

広島大学附属図書館学校教育学部分館